# 佛教三寶紀念特刊

佛紀二千六百年

# 傳說之名與形

# 序

皇紀二千六百年の記念事業として、本町小學校研究部で、傳說竝に倉賀野城の史跡を調査し、傳說を蒐集して冊子とし鄉土の人の坐右の友に供せんとする事は、誠に好箇の記念事業である。本町は古い歷史を持ち、古代上毛文化の一中心地たりし事は、內務省より史蹟天然紀念物として指定せられた、千間山、大鶴卷の二大古墳を初め、實に二百七箇の古墳の跡が存する事でも明である。又一面には中仙道の宿場で烏川河岸は江戶と信越路を結ぶ交通運輸の要衝の地で明治初年迄華かな町で版畫に河岸の船頭風姿が殘された程由緖も深かつた然し悲しむ可き事には現在記錄、文獻が乏しく所謂古老も大方物故し年と共に歷史は不明の一途を辿りつゝある、田園の都會化、天然の人爲化と云ふ事が現代文明の特色である今日は一層昔の面影が不明瞭になる事は歎かはしい事である。偶々千載一遇の此機會に傳說が蒐集せられ後世に傳へらるゝ事は誠に有意義である。鄉土は我等が敬慕する祖先が永遠に眠る地であり又我等の搖籃の地で我等は一生涯忘れる事の出來ぬ地である、少年時代に釣を垂れた川や、戲れた丘や、社の森は懷しい昔を語り、年々咲く花や、果物にも、親みがある、我等は鄉土に關する限り何もかも聞きたい知りたいと憧憬する。鄉土を善く知り善く味ふ事が愛鄉心を

培ひ、高める事になる、一國の歴史は其國の寶であると、同様に町の歴史は其町の至寶で其れを見たい知りたいと願ふのが人情である、偶々其願が此書に依り達せらるゝ事は洵に愉快である。茲に我國は光輝ある年を迎へ躍進日本の巨歩を東亜の天地に印しつゝある秋、國民は一層日本の歴史や國柄を善く知る必要があると同時に、其細胞である鄕土の姿をはつきりと認め、一層愛國心と愛鄕心を高潮させ國力の發展に寄與せねばならぬ、此意味に於て此册子の出現は善い結果を齎らす事と信ずる。出版に多大の物質的援助を與へた須賀新一郎氏の美擧に敬意を表すると共に、編纂の勞を惜まず奉仕せられし德井敏治校長竝に職員諸氏に感謝して序とす。

倉賀野町

松本　忍

# 序

吾々にとつて、吾々の持つ歴史程尊いものはなからう。吾々の精神的遺物はこの歴史に依つて傳へられ、この歴史の正しい認識は、現在をより正しく認識せしめ、現實の生命の眞意義と將來への生き甲斐とを明瞭に把握せしめるからである。

現代の吾々國民が皇紀二千六百年の光輝ある歴史を認識する事に依つて、如何に強く國民的自覺に目覺め國民的感謝に感激し得る事であらう。この意味に於いて、吾々現代人にとつては、その史實の探求と正しい歴史の認識とは、極めて重要な意義深い爲事でなければならない。

偶〻皇紀二千六百年を記念して、我が鄉土倉賀野町の歴史が、由緒ある倉賀野小學校研究部の企てに依つて世に明らかにせらるゝに至つた事は、我が鄉黨の無上の幸であり欣びである。傳說の町と世に傳へられて來た、倉賀野町の歴史は、今日茲に「傳說の倉賀野」と命名せられ、過去に對する歴史の新しい解釋を果し、將來に向つての新しい變革の使命を帶びて、雄々しく生れ出たのである。この新しい生命こそは、倉賀野の鄉人をして發奮興起せしめ、明日への躍進を遂行せしめる原動力でなければならない。我輩は少壯にして鄉邑を去り工業

日本の戰士の一人として勞苦を嘗め今日に至つたのであるが、この間常に懷鄕の情胸中に燃え、愛鄕の眞情は、日夜の自己鞭撻の師であつたのである。

不圖客臘鄕黨の諸賢の御支援に依り、倉賀野工場建設を實現し、鄕土振興に貢獻せん宿望の一端を具現し得たのである。奇しくも「傳說の倉賀野」を產んだ母體倉賀野城址が工場敷地に選ばれ、今や銃後の第一線に立ち、鄕黨を擧げて國家奉公の一路を邁進しつゝある今日を想へば、轉因緣の尊さに感奮を禁じ得ないのである。玆に倉賀野小學校研究部の尊い業蹟に對し最大の敬意と絕大な讃辭を呈する次第である。

昭和十五年盛夏

鎌倉山高砂山莊にて

須賀新一郎

編　　者

# 序文

人は鄉土に生れて鄉土に育つ。其の產土の地が山河風物の自然に惠まれ、歷史に優れ人情に厚く傳說に豐な時。まさに其所に生を享けしもの、誰かその幸を思はないものがあらうか。偉大なる鄉土の懷に抱かれて、人々は鄉土に感謝し鄉土を愛し鄉土に報恩の生活を約束づけられるものである。

人々は鄉土の今昔に思ひを廻らす時、一木一草に無限の愛着を感ずるものである。この愛着あつてこそ、眞に鄉土意識に燃えて鄉土の誇を經驗するものである。鄉にあるものも他鄉にあるものも、鄉土の誇を我が誇として發奮の一路を辿らば、あつぱれ一生の名を成すものぞかし。

されど人知日に進み、文化の風潮愈々我々の生活に泌み入る今日、動もすれば多忙に忙殺されて、自然と人生とに對する敬虔の念を失ひ、鄉土愛好の精神の薄らぐ憂なきにしも非ず。ましてや美しく鄉土の持つ傳說、はては在りし日の懷しき物語など、忘れ勝ちである。

傳說は我々の先祖の尊い贈物であり、我々はこの殘されし贈物を健康に育てあげる責任がある。一木一草に秘められし傳說を賞でて後世に傳へざれば、鄉土は沙漠の如き潤なき單な

る生活の戰場と化す。幸に素朴にして歴史に富み、應永の昔より要害の地として名だたる倉賀野、早くより文化に惠まれて若く發展的な倉賀野は、傳說の地倉賀野と言つても過言ではない。

今や我が躍進日本、膨脹大和民族は、聖戰下に輝しき皇紀二千六百年を迎へて感激に滿つ。茲によき年を記念すべく、烏の流れにも似て滔々として盡きぬ、我が鄉土倉賀野の傳說を收錄して坐右に供せんとす。元より拙文にして內容の貧困を悲しむものであるが、折角皆樣の我鄉土の傳說なりと言ふ溫いお心によつて、育てあげ賜はらは幸甚です。

この集錄に對して、直接間接にお力添へ下されし幾多の古老に、深甚なる敬意を表すると共に、時たま〳〵倉賀野城に最も由緣深き「城の家」に健かに生ひ立ち、錦を故鄉に飾りし我が國實業界の重鎭、倉賀野工場主須賀新一郎氏、この企に絕讃を傾けられ、茲に雄々しくも同氏によつて出版の運びとなれるものにして、我々は一入の感激に滿ち、衷心より感謝の誠を捧げるものであります。

皇紀二千六百年　七月七日

支那事變記念日

徳井敏治

# 郷土よ

郷土よ！
御身が我々を生み、我々を育てゝくれることは知つてゐる。
しかし
御身は、御身の永い間の經驗、數々の思ひ出を胸深く秘めて、徒らに語らうとはしない。
たゞ
御身を慕ひ、御身を懐しむ者には、喜んで話もし語つてもくれる。
我々は
常に偉大なる御身を尊敬し、遠慮深くして而も、敬虔な御身に感謝の誠を捧ぐ
そして
御身の秘めて居られる物語のすべてを聞かして戴き度いと、心から願つて居る者の集ひである。
幸に
今は、御身によつて語らるべき、ありつたけのものを聞かせて戴いたことを喜ぶ。

そして我々は、これを後世に残りなく傳へることを約束する。

傳説の倉賀野

一

こゝ上毛野南端に
守りも堅き要害や
古りし傳へも名殘なく
文化の風や現實を
映して淸き烏川

二

こす越後路や信濃路に
通ふ牛車の牛街道
井戸八幡に詣でては
興亡すべて夢に似て

名も雁(かりがね)の城の趾

三

弓張月の影消えて
悲しく散りにし奥方の
恨を含む天神の
老松いまは枯れ朽ちて
石祠の語る物語

四

行き交ふ人の袖とめて
義理と情の夜の契(ちぎ)り
宿場女郎の跡絶えて
ありし榮華をそのまゝに
殘す形見の太鼓橋

五

時は流れて徳川の
誇りに映(は)える江戸住居
毛槍奴に露ばらひ
走る飛脚の思ひ出に
松吹く風の中仙道

六

古くして若き倉賀野に
古老の語る言傳(ことづて)は
祖先の殘せし贈物
いで鄕土人(はらから)よ言擧(ことあ)げて
傳へまつらむ何時の世までも

# 目次


一　永泉寺の古手狢……一
二　御手洗の池……七
三　一本杉……一二
四　白山神社の白蛇……一七
五　正六の藥師様……二二
六　北向道祖神……二四
七　梅の木と草鞋……二八
八　倉賀野城の城紋左巴……三一
九　狢に取りつかれた話……四〇

一〇　正六不動院の祈禱……四四
一一　辨天様の池……四六
一二　九右衞門火事と天狗……五〇
一三　馬頭觀世音（永泉寺前）の由來……五六
一四　穴池の大蛇……六〇
一五　正六の淺間山……六六
一六　三光寺稲荷……七一
一七　榛名入沼木部駿河守奥方の位牌……七四
一八　田子屋の獅子……八一
一九　正六お堂前の墓地の由來……八四
二〇　井戸八幡……八七

二一　水難よけの柄杓……九一
二二　太鼓橋……九四
二三　安樂寺の七佛藥師……九六
二四　閻魔堂……一〇〇
二五　天神の松……一〇三
二六　葬頭川ばあさん……一〇八
二七　頭を坊主にする狢……一一〇
二八　ちゞり山……一一九
二九　塚の越……一二二
三〇　淺間山（千間山）……一二六
三一　並木……一二七

三二　幽靈石……一二七
三三　人とり橋……一三〇
三四　長賀寺稲荷……一三二
三五　上町一里塚……一三九
三六　狢　山……一四一
三七　下町の庚申樣……一四三
三八　八幡裏の大蛇と小蛇……一五一
三九　狢の淸さん……一五三
四〇　養報寺の七佛藥師……一六三
附　寫眞及略圖

# 傳說の倉賀野

## 一　永泉寺の古手猪

倉賀野の町にも鐵道が敷設され、停車場さへ出來た其頃の事です。明治も初めの頃とて、今の樣に立派な田や畑があつたわけでもなく、まだ〳〵荒地もあれば、處々には雜木林や森林までもありました。そしてこの荒地や雜木林は狐狸の住家となつて、當時の人々に種々の話題を殘して居ります。

丁度此の頃の或る夜の事です。

今、倉賀野驛を發した下り列車が、永泉寺裏に差掛つた時、ふと前方にこれも倉賀野驛へ向つて同じ線路上を走つて來る汽車があり

ます。機關手さんは大變驚いて、大急ぎで停車致しました。そして危險信號を發しましたが、もう目前に迫つた汽車は物凄いといふよりは、覆ひかぶさる樣な恐しさで進んで參りました。もうこれ迄と思つた瞬間！驀地に進んで來た筈の今迄の汽車は、何の跡形さへもなく、眞暗闇の中には、かきむしる樣に頭の毛を兩手でしつかと摑んだ儘、氣を失つて倒れて居た機關手を見出したのでありました。

こんな事があつてから、誰いふとなし、

「あれは、永泉寺の古狢の仕業に相違ない。」

「永泉寺狢だ！永泉寺の古狢だ！」と、言はれる樣になりました。

それから後も時々汽車を止めたり、坊さんになつたりして、人々を騷がせました。これが段々と評判になつて、町の人々も自然夕方などの畑歸りが早くなつたと言ふことです。

さてこの評判を知つてか知らないてか永泉寺狢は、暫く影も形も

見せなかつたが、しと〳〵と雨さへ降る淋しい夜の事てした。高崎を發した上り列車が、今將に倉賀野驛構内に差掛らうとした折、文字通り漆黑な闇に一層黑く濃さを增して、火を吐く樣な燈火を點じ「ゴーッ、ゴーッ」と、音を立てゝそれは〳〵譬へ樣のない物凄さてこちらへ向つて來る列車がありました。

餘り速いのと急なのて、汽車を止める暇も何もありません。只夢中てす、其の瞬間兩方の汽車は激しく衝突致しました。

ところが何と意外な事てせう。あれ程勢よく、そして激しい衝突に何の振動さへも、何一つの衝擊さへ感じませんてした。只その折、不思議な獸の吠き聲が聞えたに過ぎませんてした。

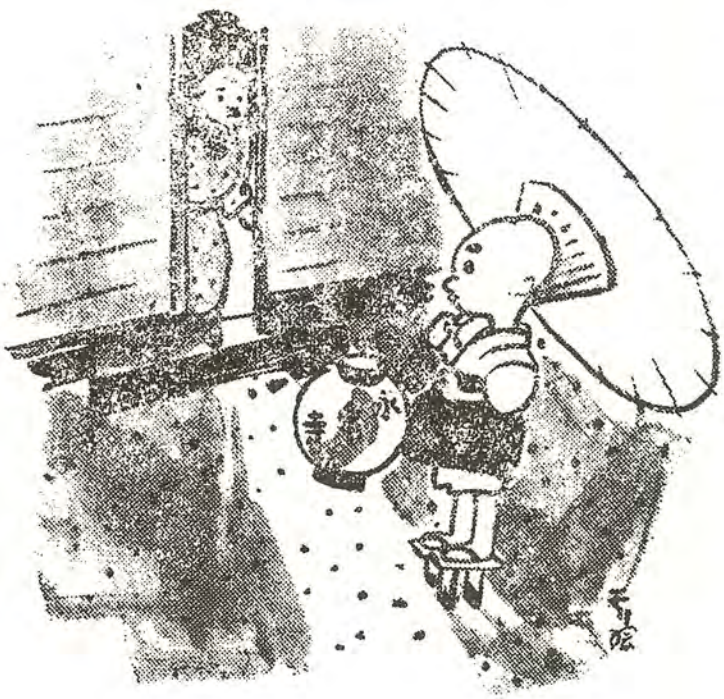
汽車は其の儘、何の事もなく倉賀野驛に入りました。

一體どうした事なのてせうか？

雨はまだ音もなく降り續いて居ります。

さて其の夜も遅くなつてから、町の仲程にあるお醫者様の雨戸近くに「今晩は、今晩は」と、起すものがあります。お醫者様は不思議に思つて「この夜更けに一體どなただらうなァ」と獨言を言ひながら、雨戸を開けて見ると、其處には見た事もない一人の美しいお小僧さんが傘をさして、永泉寺と書かれた提灯を持つてしよんぼりと立つて居りました。お醫者様は

「この夜更けに何の御用かの」と、尋ねました。お小僧は「實は和尚さんが先程火傷を致しましたので膏藥を頂きに參りました。」と、



涙もこぼさんばかりに言ふのでした。お醫者様は「それは〳〵お氣毒な。」と、言つて直ぐ奥から膏藥を持つて來て、よく傷の所に貼る様にと親切に敎へて渡して下さいました。お小僧は「どうも濟みません。濟みません。」と、一二回丁寧に頭を下げてから膏藥を受取つて歸つて行きました。お醫者様も、其の夜は其の儘床に入りました。

雨の夜も明けて次の朝、何氣なしにお醫者様は、昨夜の不思議なお小僧を思ひ出し、受取つたお金を見ますと、何と不思議や其れは全部樫の葉ではありませんか。……

「昨夜戴いた時は、確かにお金だつたのに。」愈〻不思議になつたお醫者様は、これは永泉寺へ行つて和尚さんに聞いて見るに限ると思ひ、直ぐ仕度して出掛けました。

一切の話を聞いた和尚さんは「そんな事があつたのですか。」と、さも驚いた様に聞返しました。そして首をかしげながら「寺にはお

小僧なんか一人も居りませんよ……はあー思ひ出しました思ひ出しました。それはきつと古狢の戯かも知れませんね。この狢は隨分古くからこの寺の裏穴に居てもう大分齡も取つて居るし、何にても化けられるので町の人々は「古手狢」、「古手狢」と、言ふ様になりましたよ。」

お醫者様は始めて謎が解けた様に「はあー成程ね。」と、言つて間もなく立歸りました。お醫者様が歸つた後で、和尚さんは古手狢の隱れてゐる穴へ行つて見たら、古手はお醫者様から頂いた膏藥を貝殼ごとぺたりお尻へ貼付けて寢て居りました。

今でも永泉寺の狢が汽車に化けたとか

坊さんになつて提灯をさげて居たとか

等、時折町の人々に噂されて居ります。

又一說に永泉寺の古手狢は白狐の誤りてあるとも言はれ、この白

狐は今より凡そ四百年程前にこの寺に來て、それより明治の初期まで約三百年もこの寺の境内に居たもので、或る時は火の玉となり、或る時は坊さんなどになつて人を驚かし、汽車をとめたり夜道する人を迷はしたり、お醫者様へ膏藥を貰ひに行つた事などもこの白狐であると言ふことです。

## 二　御手洗の池（お玉ケ池）

昔々、崇神天皇様の御子に豐城入彦命、活目入彦命の御二方がありました。

御二人共大變お賢い方でしたから、天皇様はどちらのお方に御位をお讓りしたらよいかわかりませんでした。

そこで、天皇様はお二人のお夢によつて後繼をお定めにならうとなさいました。

その晩お兄様の豐城入彦命は三諸山に登つて三度槍を取つてお突きになり、又太刀をお振ひなさつたお夢をごらんになりました。

又御弟の活目入彦命は三諸山に大きな網をはつて、澤山の雀をお捕りになつた夢を御覽になりました。そこで天皇様は豐城入彦命には東國をお鎮めになる樣、又活目入彦命は、天皇の御位を承繼がせられる樣に仰せになりました。天皇の御命令をお受けして、豐城入彦命は東國にお向ひになりました。そしてこの倉賀野の地にお出でになりました。

大國魂命から戴いて來た御石を置かれてお腰をかけてお休み遊ばされました。

その記念に松を御手植になられました。その後御手を洗はれやう

（1）

「永泉寺の古手猪」の物語を

祕めた竹藪　←

↓ 池の洗手お（2）

↑（3）

一本杉

様師薬の六正（5）

（4）
堂おの「蛇白の社神山白」

（6）
北向の道祖神

となされましたが、生憎水がありません。これは弱つた。と、お考へになつて邊をお見廻しになりましたが水はありません。腰かけて居た石を動かしなされると、これは不思議、ぽこんと凹んで水が湧き出て居ります。命は大變およろこびになつて御手をお洗ひになられました。御手植の松はすくすくと伸びて千枝萬枝の枝葉をわけて天にも屆く樣になりました。その後お手洗の池は淵がかけ、土堤が崩れて大へん大きな池になりました。池には藻が生え、周りには草が生ひ茂り物凄い魔の池の樣になりました。

その中に何時の間にかそれはそれは不思議な怪物が棲む様になりました。

體一ぱいに毛が生えてゐて、眼は煌々と輝き胴は龍に似て顔は大猿の様な怪物でした。そして一陣の生臭い無氣味な風がすうつと起り、ざわ〳〵と水煙が立つかと思ふと怪物は物凄い勢で現れます。そして附近の人々を大變惱しました。誰かこの怪物を退治る人はないかとそればかりを待ちあぐんでゐました。

この時、飯玉八郎といふ人が現はれて、遂にこの怪物を見事に退治て了ひました。

八郎は池の側にあつた豐城入彦命が、大國魂命より戴いて來た玉石の陰に身を隱して怪物の現はれるのを待つて斬り捨てたのでした。怪物が姿を消してから倉賀野の町は元通り穩やかになりました。八郎の怪物を退治ることの出來たのも玉石の御蔭でした。「玉石が倉賀

野町を救つてくれた。玉石は倉賀野の守り神だ。」と、皆口をそろへて言ひました。そこでこの玉石を御神體として神社にお祀り致しました。この石は龜石とも言つて龜に似た形をして居ります。

御手洗の池は、又怪物が現れては大變と人々が相談して池を埋立てる事になりました。しかし豐城入彦命の御手洗の池を皆埋立てゝ了ふのも惜しいといふので、少しばかり池を埋め立てずに殘しておきました。

これが神社のすぐ東の面積二坪程の池であります。

# 三一　本杉

天下麻の如く亂れた戰國の世も、元和の春と共に、世は太平を謳歌する時代となつた。

甲阪新之助は、とある旗本の嫡男に生れた。父は旗本八萬騎の四天王の一人として多數の部下を統率する身であつた。その性質は謹嚴そのものの古武士、大阪夏冬の陣に其の名を謳はれた勇將にて、暇ある毎に語り聞かすは當時の武勇傳であつた。新之助の生みの母は早逝した。父は後添を貰つた。後添には一人の娘が居た。名を桃千代と呼び母子は新之助と晴れて夫婦になる日を樂しみにして待つて居た。

然し、運命は皮肉にも新之助の心は、いつか許婚とは反對な邸の

門番の娘お露にあつた。「忍ぶれど色に出でにけり我が戀は、物や思ふと人の問ふまで」いつまでも知れずにはゐなかつた。桃千代を通じて繼母に、繼母より父へと知られた。如何に辯解したとて名ある旗本の嫡男の身が、いやしき門番の娘などと……清廉潔白の士を以つて世に聞ゆる父に許され樣もない事を知つた二人は、或る夏の夜兩國大花火を期して姿を消した。

行く先は豫ねて便りに薄ら記憶の老女中、お藤の餘生を送る上州碓氷の坂本宿であつた。江戸を出てから夜に日を次いで武州熊谷も過ぎ、本庄にたどり着いた。何の用

意とてない上に御苦勞知らず働く能なき二人には、それは此の世ながらの生地獄であつた。折しも豪雨降り續き、河といふ河は未曾有の增水となつた。船賃とて持たぬ上に、江戸から追手が迫つてくると聞いた兩名は、どうしても此川を渡らねばならなかつた。

或る夜淺瀨を見付けて川越しをした。

だが不幸にも足はすべつて河中に——怒り狂ふ荒浪の中に！明くる朝河岸近くの河原に多くの人が集つてゐた。近寄つて見れば何んと互ひに胴を結びし男女の溺死體であつた。

然も可憐にも女の體には新しい肉塊の動きさへ見受けられた。

純朴な村人の目には涙さへ催された。やがて二人のために河岸近くの高臺に比翼塚が建立された。兩親も江戸より馳付けた。此の二人のいぢらしさに肉親の愛情がこみ上げてきた。一切を許して立派な塚が立てられ、その上に二本の杉が植ゑられた　一本は大きく一

本は小さくとは優しい村人の心遣ひの表象であつた。

さゝやか乍も石塔も立てられた。よく其處には訪れる人の供へた、だんご草花の供養も見出だされる。其の邊を荒神山と云ひ人々はあの杉を荒神山の二本杉と呼び慣らした。それから荒神山はたゞ荒れるに委せられて狐や狢の巣くふ荒山となつた。

星移り年も幾度か改つて明治となつた。さしも荒れに荒れた荒神山一帶も文明開化の叫びと共に、次第に開墾され田畑となつた。

荒神と名づけた田も出來た。だがどうした理由か、水田の水掛りが惡い上によく人々が怪我をする。又其の田を耕すものの家には必ず不幸が見舞ふとさへ云はれた。人々は古老の言に從つて二人の供養塔を立てゝ懇に弔つた。其れ以來惡い事もなくなつたと人々は喜んだのである。

植ゑた二本杉は年を經て、すくすくと青天に聳ゆる大木となつた。

或る年雷が落つて一本が眞二つに割れてしまつた。幸ひ枯れはしなかつたが、その空洞になつた所に、時々乞食どもが集つて火を燃してゐた。

或る冬の朝、村人達は怒つて追出したが、すぐに又集つて來た。遂に一本は枯れた、だが拔目のない乞食どもは、他の一本にも空洞を見付けて、相變らず火を燃してゐた。訪れる人々はその一本杉の根元に黑くこげた、むごたらしい痕跡を見つけて、風雨幾星霜に曝されて立つ梢を、深い感慨を以つて眺める事であらう。

# 四　白山神社の白蛇

今こそ跡も形も無い處だが、昔ながらの言ひ傳へを殘して居るものは隨分多い。

人は今、現在形に殘つてゐる物は、それを失ふまいとして力め、不幸既に失はれた物に對しては、當時の人々の無智を罵つたり、殘念がつたりして一入懷しむものである。

これに似たものが南町の略々中心にある。

それは今の屋臺藏の所である。其の昔、倉賀野神社の認可申請に當つては、五社合併といふことが是非とも必要なことであつた。

白山神社と彌榮神社とは隨分前からこゝ南町の人達の守神として信仰を集めてゐたが、愈ゝ飯玉樣に移されることとなり到々實現さ

れたのてあつた。神社の建物は取毀はされ、大木は伐り倒された。この伐倒されていつた大木の中に、一際大きな木があつた。此の木の中に住んて居たといふ白蛇に就いての傳説てある。

木の太さは目通りてさへ大人が五、六人も手を組合せなければ一周り出來なかつたと古老が云つて居る。然も此の大木の中程は雷の爲に物凄く打拔かれたかと思はれる樣に、黑く空洞になつて居て、それが根本の處て大きく割れ外へ現に出て居るのてあつた。

ところが此の大きな虛の中へ、何時から入つたものか、それとも

前から居たものか、一匹の小さな白蛇が住んで居たと云ふ事である。この白蛇は殆ど外へ出た事もなく、從つて姿などを見せた事はなかつたと云ふが、何時誰れが見たものか、次第次第に評判になつて行つた。そして、噂は噂を生んで行つた。

「あの白蛇の姿を見たものは一生眼の病にかゝらない」とか

「あの白蛇に齒を見せると口の中の病にかゝらぬ」とか

こんな事が云はれる樣になつた。それが何時とはなしに信仰に迄なつて來た。

「齒の病を治す神樣。口の中をよくしてくれる神樣だ。」と、云ふ樣になつた。それからと云ふものは、時々子供の齒が拔けたからといつては此の穴へ入れ。蟲齒になつて痛むからと云つては願かけをする樣になつたとか。又朝など顏を洗ふ前に、よく此の白山神社の大木の根方へ來ては齒を磨いて居たと云はれてゐる。それが毎日毎

朝、誰かしら來て居ないものはなかつたさうだ。

始めは男も女も同樣に信仰して居たが、終には、どうした事か女の人達ばかりになつて、稀にしか男の人の姿は見られなかつたといふことである。

生ひ繁る大木の境内、其處に鎭る社、それだけてさへ神祕そのものなのに、白蛇が棲むとか、而も其の白蛇は遂に神の存在となつて、多くの人々の信仰の目標となつたなど、如何に傳說とは言へ不思議な物語を殘したものだ。此の邊の古老は今てさへ單なる傳說としてこの物語りを聞流してゐない。そして何處迄も信じてゐる。

# 五　正六の藥師様

正六は倉賀野の町から取り殘された様に、町續きを離れて純朴な村人によつて平和な生活が續けられて居ります。

この正六にお堂があつて、そこに東面して一つの藥師堂があります。今は荒れ果てゝ堂守さへ居らず。村の子供達の遊び場所となつて居ります。この藥師様が近郷近在はおろか、遠く他國の人々の信仰を集めてゐた藥師様だと誰が想像出來ませう。この藥師様は眼病に御靈驗を謳はれたのです。殊に一升團子を上げて願懸する時は限つて御利益があり、失明の悲しみに嘆く人々にさへ救ひの光

明を與へると云ふのです。評判は評判を生んでその盛り振は實に大したものでした。殊に寛政の頃には他の神社佛閣にも比類ない有様でした。

子に導かれる老人、親に連れられた子供、杖を頼りに歩む足どりも覺束なげな、見るも痛々し　參詣人は次から次と引きも切らず、殊に月の八日と十二日は願懸日として一際の人出でした。

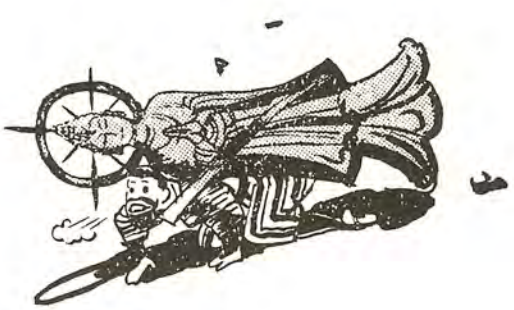
この評判をきゝつけて、ふとした慾心から惡心を起したのが武州方面の或人でした。この評判と人足を自分の土地に移し、それを利用して金儲けをしやうと企らんだのでせう。

それには藥師様の御本尊如來様を盗み出さなければならないと、或夜の事密かに如來様の安置されてゐる堂内に忍び込みました。

さて如來様を持ち出さうとした所が、何しろ七八十貫もあらうと云ふ石彫りの如來様なのですから、さう輕々と持ち出せる筈があり

ません。それでも慾に目の眩んだ一心に「うんとこしよ。」「うんとこしよ。」と、滿身の力を籠めて擔ぎ出しました。天罰がすぐ其處に待つてゐやうとも知らず……

やつとの事で前の道まで擔いで來ましたが、重さは重し、おまけに闇夜の事とて、足元も分らず、「あつ」と云ふ間もなく物に躓づいて轉びました。これが運の盡き、とうとう七八十貫もある如來樣の下敷となつて了ひました、その時如來樣の御身體も二つに割れて了ひました。翌朝村人が見つけて大騒ぎとなりましたが、結局如來樣は割れた御身體を重ね合はせて、現在の位置に安置申し上げたのださうです。如來樣の下から押しつぶされた彼の人が發見されたのは云ふまでもありません。因果應報とても申しませうか、惡には惡の報いがあり



ます。

それから幾星霜を經た今日、一升團子を供へて御靈驗を稱へたその昔を偲ぶよしもありませんが、あの石の如來樣が、重ねられた御身體をそのまゝに、子供達の遊び相手をして居ります。

然し、その當時の事を知つてか、時々線香を上げる者、願懸けに來るものがあると見え、如來樣のお膝元を黑く焦し、或は又女の人の黑髮などがあがつて居ることがあります。

## 六　北向道祖神

昔々、倉賀野の城が出來たそれよりも、まだずつと昔の御話です。御城の邊りから西烏川にかけて、晝なほ暗い程に樹木が茂つて居

りました。その山の中に、それはそれは恐ろしい怪獣が住んで居りました。

よくあることですが、この怪物は村の作物を荒し、その上に、三年おきには娘を奉らないと荒れるのです。三年目の春の祭に近い日になると娘のねるお家では、白羽の矢が立ちはしないかと、そればかりが心配で心配て、居たゝまらない程てありました。

所が到々その年は白羽の矢が、お庄屋さんの家に立つたのでした。

お庄屋さんの驚きと悲しみ

は大へんなものでした。しかし如何する事も出來ません。唯恐る恐るその日を待つばかりでした。

すると、或る日、見掛けた事もない一人の侍が、「その怪獸を退治る」と、言つて、名乘つて出たのでした。よく御話の筋にある樣に、娘を入れる箱の中に入つて、村人の松火に送られて、怪しげな茂みの中へ入つてゆきました。

翌朝になつて村人は、恐る恐るお山へ入つて行つて見ると、そこには牛の如き怪物の死體を發見しましたが、昨夜の侍の姿はあれ以來影も形も見せませんでした。

村人達は、お山の神樣に違ひないとして、道祖神を御祭りしました。これが北向道祖神の起原ださうです。

諸事願事をかなへて下さるので、この道祖神を信仰する者が多く、今に至るまで、香爐供物の絶へたことのない靈驗あらたかな道祖神

てあります。

又一説には。

日露の戰が、輝かしい終幕を告げた頃のことです。幾多の武勳に輝きながらこの倉賀野町に凱旋の勇士が數多く見えた。

ところが長い野戰の疲れのためか、かうした勇士が次々に病床に臥す身となつたのである。之等の鄕土の勇士に、若しもの事があつてはと、町の人々の心痛は又大變なものであつた。

其處でよりより相談した末、「惡病には道祖神樣を御祭りするとよいさうだ。」と、言ふことになつて、北向道祖神の祠が建てられたのださうである。

そして町の人々は朝夕この神樣に病氣全快を祈つたのであつた。不思議にも病床の勇士はめきめきと快方に向つたのである。それ以來惡病の神樣、或は子供の好きな神樣として尊信をあつめて居るの

てあると、言はれてゐる。

## 七　梅の木と草鞋

加賀のお殿様と言へば百萬石のそれはそれは偉いお殿様でした。この加賀様に仕へて居た飛脚がありました。

加賀の國から今の東京、即ち昔の江戸へ、又江戸から加賀の國へお殿様のお手紙を持つて行つて、急なお使ひをするのが役でした。

加賀から江戸迄と言ふと三百粁もあります。汽車や電車、自動車といつた乘物は一つもない時でした。「ほいかごほいほいかごほい。」と、言つて通るお駕籠位が何よりの乘物でした。歩いて行けば五日も六日もかゝるのが普通でした。

（7）梅の木と草鞋

（8）倉賀野城の城紋「左巴と五七の桐」の「五七」の桐

（10）「正六不動院の祈禱」の不動院趾

↑池の様天辨（11）
（一の其）

（二の其）

（12）九右衛門火事と天狗

木古の樅（一の其）

（12）（其の二）老楓

處が此の飛脚は大變脚の強い人でした。人々が競爭しても、あれよあれよと云ふ間にとつとつと遙に拔かれてしまふのでした。身體の輕いことは恰度犬や猿の樣でした。飛鳥の樣に脫兎の樣にすぎ行くのでした。そして此の長い道中を三日で行くといふ程でした。

人々は皆この飛脚の脚に驚いたり羨しがつたりしました。どうした事か、この飛脚がお殿樣の御用を受けて江戸へ行く途中不幸にも病の爲めに殪れました。そしてその遺骸は高橋に程近い梅の木に葬られたのでした。

此の後、人々はこの飛脚を讃へて、この墓に草鞋を供へて祀りました。人々が草鞋を供へて祀ると、屹度强い脚を持つ樣になつたとの事です。それで今でも草鞋を上げて、それを祀り脚の丈夫になる

様に願つてゐます。現在あがつてゐる草鞋はその爲です。

一説に云ふ。

それは飛脚ではなく身の丈六尺もある巨人で倉賀野江戸間を日歸りにした。或時現在の梅の木附近を通りかゝりその邊に巣喰ふ澤山の狐に魅され、發狂して切腹した。その場所に石碑を建てゝ拜んだところ、不思議と足の病が癒つたので、その後參拜する者も多くなり、草鞋を上げて拜む樣になつた。

その人の名を茂衞門樣、又は梅の木樣と云つた。その名が殘つて現在そこの土地を梅の木と云ふのださうです。

# 八　倉賀野城の城紋左巴

此處倉賀野城は、其の昔、源頼朝の家臣倉賀野三郎高俊に始まつてより、倉賀野城主、金井淡路守小田原に討死する天正年間まで四百有餘年、中山道樞要の地として、或る時は、箕輪十五萬石の緣戚となつて、街道筋の要鎮となつたり、又或時は、彼の川中島て有名な、甲斐の武田信玄に敵して爭ふ等、昔を偲ぶ幾多の物語があつた。然し、其の物語を抱擁し育てゝ來た城も今は既になく、殊にこゝ二、三年の前より殷賑產業の影響を受けて、城趾は全く一變して仕舞つた。

草木の茂みは片付けられ、土は昔ながらの香を陽に發散するが如く一鍬々々掘り返へされ、そして平坦になつて行つた。

間もなく此の土地に縁ある人によつて、大工場が建設され、鐵板に打込むハンマーの音、黑く油じみた齒車のきしる音、電氣熔接の不思議な光線や騷音等、文化的な息吹に組み伏せられて仕舞つた。

倉賀野三郎高俊は勿論のこと、城主金井淡路守も亦其の當時の人々も、誰一人として此の居城が斯くなることを夢みたであらうか。

嗚呼！榮枯盛衰は世の習とか、今城趾に立つて昔を偲ぶ時、誰か感慨を禁じ得やう。

不思議なことに、何處の城にも何かしら言ひ傳へが殘されてゐるものである。今は跡型さへ殆どないが、此處倉賀野の城にも亦不思議な傳說がある。

倉賀野城の城紋に就いてである。

倉賀野の城門、卽ち表門には「五七の桐」の紋があつた。その「五七の桐」の紋が、裏門の紋と變り、表門へは新たに井桁の中へ左巴

の紋を配したものが取付けられるに至つたとのことである。

さてこの物語は、倉賀野城が次第に衰運の一路を辿つて居た頃の事である。

或る日の夕方、城主は一時の慰みにと、家老を召され、城中奥の間で圍碁を始められた。互に碁盤を凝視しながら黒白の爭が續けられた。

一局、二局、夜の更けるのも知らないで打ちに打つたことせう。然し、どうしたことか、其の夜に限つて御殿様は一局も勝てませんでした。あせればあせる程亂れていくばかりでした。

「どうもよくない……」
「こんな筈はないが……」
「殘念だ！よし今度こそは」
といきり立つた殿は、暫く家老の顔を見すえて居たが、「ようしッ」と、乘り出すやうに、はつしとばかり盤上に石を置いた。輕く受け流した家老は、勝利に誇る色も包みきれず、微笑さへ浮べて何等動ずる樣子もなかつた。
言葉にこそ出さないが、殿の一擧一動には恐しい殺氣が漲つて居た。其の殺氣を帶びた儘盤面は次第に進んで行つた。
引き締つた口元、鋭い兩眼……
これは殿の必勝を目標す異常の緊張を物語るものであつた。斯くて初盤も過ぎ、中盤に入つた。
今度こそは好調！これは殿の胸裡深くにひめられた喜びの聲だつ

た。

愈々終盤、誰れが見ても殿様の勝利には疑ひがない。今迄勝誇つてゐた家老の面にも、漸く動揺の色が濃くなつて來た。大奥は、今こそ嵐の前の静けさそのものであつた。好調に氣を好くした殿、苦境打開に全智全能を傾ける家老、勝敗の常とは言え隨分大きな距りであつた。この距りを何回も繰り返しては苦悩をなめて來た殿だけに、今の喜びは大きかつたに相違ない。終局も愈々數刻に迫つた。必死の家老は防戦よく務めたが、敗勢は如何とも致し方がなかつた。家老は此處で最後の長考に耽つた。

「いくら考へても同じ事、もうこれより仕方がない。」苦悩十數分、やがて一石が落す様に置かれた。

何の躊躇ぞ！と、いはんばかりに殿も續いておく。

「おや意外なところへ。」家老は目を見張つた。そしてすくひあげ

る様に殿の顔を見上げたが、勝利に誇る殿には何等の反省もなかつた。誇る者の大なる失着であつた。家老は、此の機を逸してなるものかと、一際大きく音をたてて大事な一石が下された。

これこそ命取りの一石であつた。

愕然！色を失つた殿は、口もおどろもどろに「暫く暫く。」と其の石をおさへた。指先は大きく震へてゐた。

然し待てない一石である。待てば敗れることに決つてゐる。

「待てば負けるではないか、戰場に待てはない。」と、云はんばかりの家老であつた。

殿の眼尻は次第につり上り、無念の口元は小刻みに動いた。盤上にあつた殿の手は静かに兩脇に戻されてきた。そして側にあつた大刀を取るが早いか「無禮者！」と、大喝一聲、其の瞬間！

大奥の静けさは破れた。そして家老の首は胴と離れて盤上に坐つ

た。

何と不思議ではないか。盤上の首はしつかと殿を睨んだ儘、眼を大きく開いてゐるではないか……

妖怪！奇怪！

血腥さい不氣味な裡に、肩でする樣に大きな呼吸が幾回も續いた。大奥に起る夜更けの物音に驚いて駈付けた時は、盤上の首に喰入る樣に見つめてゐた放心狀態の殿を發見したのであつた。殿は愕きと恐しさとにおどおどするばかりだつた。間もなく殿は體中の總ての力で跳び離れた。そして、「此の首を余の刀と共に煮殺せ。」と、命じた。お付の者は恐る恐る命ぜらるる儘に準備した。大きな釜が用意され、釜番人さへ出來た。そして其の夜は到々煮明した。

明くる朝になつて蓋を取つて見ると、何と一夜中煮明かした首である筈のものが、少しも變ることなく、前にも增した形相をしてゐるのである。此のことを聞いた殿は、七日七夜の間、熱湯で煮殺す

様にと更に嚴命したのであつた。それからは前よりもどんどん火を炊いて、全く七日七夜生首と刀とを煮盡したのであつた。今度こそ大丈夫であらう。如何に剛の者でも何んの事はあるまい。そこで役人立會の上、愈々蓋を取つて見ることにした。釜番の一人が大きな蓋を抱へる樣に取つた。其の一瞬！首と共に煮られて居た彼の刀が飛び出して來て、この釜番の首を切落した。そして刀は元の釜に入つた。同時に切られた釜番の首も亦此の中へ入つて仕舞つたと言ふのである。並居る一同は色を失つた。言葉一つ出ない。然し、此の恐怖にも增して一同の驚いたのは、七日七夜煮續けて來た彼の首が、前と少しも變つて居ないことであつた。そして、今跳び込んだ釜番の生首を追ひかけてゐるではないか。ぐらぐらと煮返る湯の中とは言え、二つの生首が、此の釜の中で追ひつ追はれつしてゐるのである。而も左巴に廻つてゐる。何時迄たつても容易に納りさうもあり

ません。流石の殿様も之には施す術もなかつた。

「ああ悪かつた。許してくれ。」

殿様は始めて後悔と懺悔とをした。そして釜の端に手をかけ顔を突込む様にして、何回も何回も詫びたのであつた。すると不思議や、今迄のあの恐しい形相は微笑にかはり、左巴になつて追ひつ追はれつして居た二つの首は、何時の間にか納つて居た。

「餘りと言へば不思議なことだ、これも皆余の仕打ちが悪るかつたからだ。」とて、殿様は大變恥ぢたといふ事である。此の時左巴になつて首が廻つてゐたところから、亡者の供養を兼ね、其の靈を迷路から救ひ、今後の戒にもとて、今迄表門にあつた倉賀野城五七の桐の城紋を、取りはずして裏門へ移し女の紋所とした。そして表門へは「左巴」の紋章を配して城紋としたと言ふことである。

今。五七の桐の紋は永泉寺に殘されてあるが、左巴の紋章はこの

邊に見當らないのが惜しい。

## 九　狢に取りつかれた話

昔から狐や狢が、よく人にのりうつつたとか、彼の人にはおさきがついて居るのだ等、面白いといはうか、不可思議といはうか、全く半信半疑の云ひ傳へが、世の中には隨分あります。

この永泉寺にも、之に似た話があります。否話どころか、到々それが爲に命をとられたのだそうです。

「永泉寺の古手狢」の傳說は餘程遠い所まで知られてゐる樣ですが、此の話も矢張り此の頃の事だつたのでせうか？

今こそ寺の附近は立派な田や畑ですが、其の時分は、どうしてど

うして迚もこんな譯のものではなかつたそうです。寺の前から西北にかけて、一丈も二丈にも及ぶ大規模な土手が廻されてあつて、而も不氣味な藪、雜草で覆はれて居たとの事です。子供は近寄ることを恐れたし、大人でさへ心よく思はれなかつたらしい。從つて是れを乘り越える時などは土手が高いと云ふよりは薄氣味惡るいといふ方が先だつた。

此の樣な境内であつたから、狐、狢の住場所にはもつて來いと云ふ所でした。澤山の狐や狢が毎日の樣に庭先で遊んで居たり、附近の藪でないたりして居たさうです。斯うした獸が澤山居ることを知らない譯でもなかつたのでせうが、小春日和の午後のこと、和尚さんは附近の藪で自然薯を掘らうと鍬を肩にして出掛けました。暫くして一本の太い蔓を見付けました。そして頻りに鍬を打込んで居つたのです。ところが、今掘つて居る和尚さんの鍬先には、狢の住ん

て居る穴があつたのでした。

自然薯を掘ることに一生懸命な和尚さんは其處にあつた狢の巣などは少しも氣に留めませんでした。到々狢の巣はすつかり取り潰されて仕舞ひました。

和尚さんは、漸くのこと掘取つた薯を持つて歸つて來ましたが、何處となし元氣がなかつたさうです。

「これはおかしい少し變だぞ。」と、言つた儘、ごろりと横になつて仕舞ひました。それからと云ふものは床に就きつきりて一度も起きません。時々譯もわからない譫語を云つたり、不思議な食物を慾しが

つたり致します。皆は不審がりましたが、どうしたのか誰にも分りませんでした。

それから間もなくのこと、附添ふ人々の熱心な手當の甲斐もなく到々和尚さんは此の世を去つて行かれました。

一體どうしたと言ふ事なのでせう！

病氣らしい病氣とも云へないのに、おかしいことがあつたものだと、不審は増すばかりでした。餘り不思議なことなので、和尚さんが掘つて行つた藪へ行つて見ることにしました。

其處には狢の居た穴があつたが、自然薯を掘る爲にすつかり穴や巣が潰されたり、毀されたりして居ることが分りました。是を見た人々は「あ、さうか、やつぱり狢の祟りかなあ、うつかりの事は出來ないものだ」と、今始めての樣に歎息したと云ふ事です。

# 一〇　正六不動院の祈禱

今から、ざつと四百年ばかり昔の事でした。正六と言ふ土地の人々は、不思議な力を御持ちの不動様を信仰して居りました。人々は餘りにも、あらたかな御不動様の靈驗を廣く世の人々にも傳へて、共に禮拜し、御力にすがらうとして、御尊像を安置した一つの小さなお堂を建てて、祈禱所と致しました。堂守りも出來ました。人々は木の香も新しい立派なお堂を中心に集つては、禮拜しました。

禮拜は年を追ふて盛んになつて行きました。

ところが或る時、堂守に占ひの上手な人が出ました。家相人相さては紛失占ひなど、實によく當るのでした。次第に噂は他國にまで

響きましたので、思はぬ遠方から尋ねて來る人もあり、お堂はいつも大繁昌になりました。

かうした事を徳川の御代には、よく一般公衆に公告するために高札をたてたものでした。高崎藩でも色々多くの高札を辻々に建たものでした。どうした理由か？或る時其の高札が次から次へと何者かに引き拔かれ、持ち去られるのでした。役人達は藩の名譽にかけてもと躍氣になつて捜査しましたが、何んの手掛りもなく、高札の行方も知れませんでした。

遂に役人も此の御堂に來て、不動様の祈禱占ひをして貰ふことになりました。占ひによれば高崎の西北、君が代橋下にあるとのこと、

役人は、それッと、走り調べると、正しく件の高札が見出されたと言ふ事です。

それ以來、御代を重ねること數代、明治九年の改正に至るまて祈禱占は續いたと言ふことてあります。

星移り年も變りて今はその面影だになく、只七つ、八つの石塔がそのかみの堂守の御墓と思はれるのみてあります。

（因に、今其の地は須永某氏の所有になつてゐるとの由）

## 一一　辨天様の池

辨天様に池は附物てあるとか云はれてゐる。

成程そう云はれて見れば、辨天様のある所には必ず池や沼がある様

てす。そして、其の池や沼には、大概龍や蛇に關する傳說が殘されて居る樣てす。

「火の無い所から煙が出ない。」と、の譬もある樣に、全くの傳說として一笑に附せない何ものかがある樣てす。科學の力では到底說明出來ない神秘的なものがある譯てせう。

是れに就いて、つい最近の事てすが、八十年毎にお開帳する或所の、觀音樣を、是非見たいと言ふのて、無理にお願ひして入つたところ、何の理由もなく、その方は顏面に外傷してしまつた。まだ其れよりも不思議な事には、それと同時刻に家に居た奧さんが鼻血を出したとか、此處が笑つて過しきりに出來ないところてせう。

さて倉賀野山養報寺の境內にも神秘的な傳說がある。而も之は大人の傳說と云ふよりは寧ろ子供の世界の傳說に近いのてある。

「辨天樣の池」是れに就いての事てある。

此の池の中から白蛇が出るとか云つてゐる事です。

子供が時々辨天様の橋の方から、轉ぶ様に駈出して來る事があります。恐怖そのものの眼付呼吸、中には泣いては居るが涙は出て居ない者もある。

「一體どうしたの。」と、聞けば、子供等は我先に白蛇の抜殻があつたんです。」と、云ふ。「なんだ、それ位の事に。」と、行つて見るとそれは白蛇でも何でもない。風に舞ひ落

ちて途中木の根、石かどに引懸つた白い布切れてはないか。然し子供は簡單なものです。誰か一人が「白蛇だ。」と、言へば夢中で逃げ出すのです。此の樣に子供達は、辨天樣の池の所へ來ると、その都度白蛇の事を思ひ浮べて居るに相違ありません。誰から聞いた事なのか最近では、息をしないで池の周りを三回廻つてから上を見ると必ず不思議な白蛇の姿が空天に見られる、といふことです。

女、子供は、此處に建てられた辨天樣と、この辨天樣を取卷く樣に巡らされた古めかしい池との間に、何かしら不思議な因緣てもあるかの樣に信じてゐる。

そして今ても子供達は

「辨天樣の所へ行くと白蛇が出るぞ。」等、互に言ひ合つてゐるのも面白い事てはありませんか。

# 一二　九右衛門火事と天狗

「信仰には不思議な霊顕が付物である」

今は昔、安政二年春三月、倉賀野町が火災に遇つて、見る影もない焼野ヶ原と化した事がある。人々は、百姓九右衛門の宅が火元だと云ふので、九右衛門火事と言傳へて居る。

時もあらうに、丁度お彼岸の中日。

「火事だ！」と、叫ぶ聲は人々を恐怖のどん底にぶち込んだ。只さへ風があつたのに、火事場に卷き起る風は、唸を呼んで物凄く。惡火とても言ふのか火勢益々強く、見る見る中に擴がつて全く手の下し様もない。

女子供の泣き叫ぶ聲、人畜の傷ついて呻く聲、此の世の聲とも聞

えず、火焔地獄さながらの有様であつた。

今も尙、一丈も深い古井戸の底から掘出される下駄、枕、はては神棚に供へる御燈明臺など、數々の燒殘りの品を見ても、そぞろ當時の慘らしさを想像する事が出來るのである。

茲にあまりにも不思議な言傳へがある。

この猛火に遇ひ、全町悉く舐め盡されたと云ふに、只一軒……

それは丁度關東大震災の折の淺草の觀音樣のそれの如く、**ポツン**と燒け殘つた舊家があつた。

古老は此の不思議を、かう傳へてゐるのである。

この荒れ狂ふ猛火の中に、何處からともなくスーッと姿を現した、見るからに崇高な大天狗！

其の舊家の庭先に植ゑられた楓の老木から樅の大木に、そして屋根の棟へと跳び移つて、ヂット炎々の虛空を睨み、形容の出來ない

昂奮の中に、防火よく勤めたとても云はふか、口に法文を唱へてゐたと言ふ。

さしも暴威を極めてゐた猛火も、翌朝になつて静まつた。静まつたと云ふよりは、寧ろ燒くべき何物も無くなつたと言ふ方が確だ。

此の猛火の狂態！焔魔の戰慄の中にあつて、燒け殘つた舊家に集まるとりどりの噂！天狗を目擊したと云ふ人々は「あゝ」あそこの家の方々は、古峯様を常に信仰してゐるので、古峯神社の天狗が來て助けて下されたのに相違ない、屹度さうだ……と、燒け出された慘らしい恐怖と悲しみの中にあつて、まざ〳〵と見た記憶の底から甦つて來る慈悲の姿に只々打たれて居つたと言ふ事である。

その折、屋根の棟に殘した大天狗の爪が、今も尙、此の舊家の寶となつて保存されてゐるとか？

「信仰には不思議な靈顯が付物である。」と、再び言ひたい。

著者は此の舊家を訪ねて見た。

そして不思議な先祖からの言傳へだと言ふ話を尙も聞いた。

「私の家の庭に樅の古木がありませう。先祖の頃は、毎年初幟を此の木に立てたのだそうです。」

「……」

「すると何時の間にか、此の初幟が無くなつて、其の都度不思議に、古峯神社に納つてゐたとの事です。」

「ハハ――――」

又ずつと前の先祖が、永の病魔に冒されて、死も全く時間の問題となつて、家中の者も既に諦めて居た或る日、最後の神頼みとても申しませうか、此の家の老婆が手燈といつて、手の掌に油を注ぎ、それに蕊を燃して、何か頻りに口の中で唱へてゐたそうです。」

「……」

「すると折から月光に照り冴えた空の背景に、くつきりと鮮やかな影像を作つて、天狗様が現れて、ジーッと、此方を睨んで居る様子。……

「……」

「睨んでゐたと言ふより、慈悲に輝く眼であつたのでせうか？所が不思議や、天狗様が姿を消された頃、死に直面してゐた大病人が、手の掌を返す様に急に元氣づき、數日の後には全快して、内祝まで も出來る様になり、吉日を選んで古峯様に禮參りの相談も運ばれてゐたとの事です。」と、話して下さる方も奇異に打たれて、語つて下さいました。

× × × × ×

怪奇と言はふか、不思議と言はふか、このあやかしの物語に登場する楓、樅の老木。つひ此の頃まで道行く人々に、その上の出來事

をそつと話かけてゐたと言ふ。

（この舊家こそ須賀某と言ふ溫厚篤實な醫師の家で、前に掲げた寫眞は幾多の傳說を秘めた楓と樅の老木である。）

## 一三　馬頭觀世音（永泉寺前）の由來

今を距る百五十年前、天明の頃上州倉賀野在に、德兵衞さんと云ふお百姓さんが住んでゐました。

德兵衞さんは大邊熱心なお百姓で、毎日毎日精を出して働きました。そしてお金がたまるのを樂しみにしてゐました。德兵衞さんには只一つ欲しくて堪らないものがありました。

それは外でもありません。一頭の馬でした。德兵衞さんが毎日毎

（14）穴池の大蛇

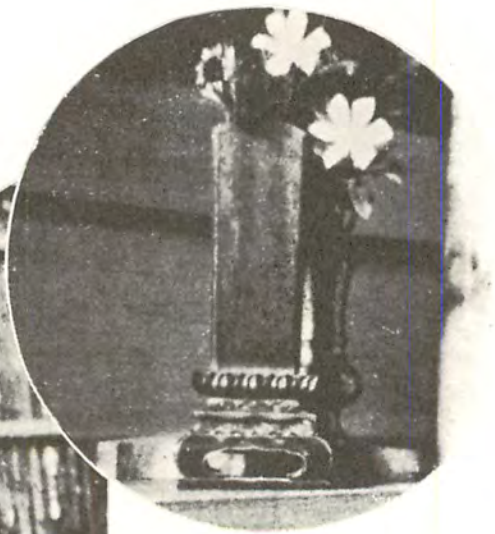
（其の一）諏訪社

（其の二）現在の穴池

（15）正六の浅間山遠望

(16) 三光寺稲荷

同　駿河守の墓



(17) 榛名入沼木部
駿河守奥方の位牌

日一生懸命鍬を振ひ金のたまるのを樂しみにしてゐたのは、この爲めでした。やがて幾年か立ち、徳兵衛さんは、澤山なお金がたまり

ました。そこで欲しくてならない馬を一頭買ひ求めました。之から後は田圃や山へ行く時は、必ず可愛い馬をつれて前よりは一層一生懸命働きました。

其れは或る冬に近い秋の朝でした。愛馬を連れて眞白に霜を置いた野道を、徳兵衛さんは山へ急ぎました。山へ着くと、楢の木に馬の手綱を結び自分は谷間へ薪を切りに降りました。

徳兵衛さんが谷間へ下りた留守に、近くの杉の森で狼が「ウヲーウヲー」と吠きました。

心根のやさしく驚き易い馬は、耳を立てゝ「ヒヒン」と嘶きながら谷間にゐる徳兵衛さんの所へ行かうとしました。すると急に何かに躓づきました。起き上つて馳ると又躓づくので「ブッリ」と手綱が切れてしまひました。向ふ見ずの馬は主人を慕ふ一念から自分の危険も知らず、谷間を一目散に駈け下りたので、止まらうと思つて

も駄目でした。更に運の悪い事には下には三丈もあらうと思はれる絶壁があります。「ヒヒンヒヒーン。」と、悲しくも又淋しい聲を全身から振りしぼつて嘶き續けながら、可愛想にも、谷底深く落ちてしまひました。

薪を切るのに餘念のない徳兵衛さんの耳に、此の哀れな馬の嘶き聲が入らぬわけがありませんでした。

徳兵衛さんは手にしてゐた鉈も薪も、ほうり出し、倒れてゐる馬の所へ駈付けました。併し其の時遲く無慘にも馬は、已に息絶えてゐました。自分の子とも賴んで、仲睦じく毎日毎日働いてゐた馬に死なれたのですから徳兵衛さんは、聲を上げて泣きました。可愛想に一週間も徳兵衛さんは馬の傍を離れ樣ともせず、泣き悲しみました。

徳兵衛さんの餘りの悲しみは、慰め樣もありませんでした。やが

て村人は一つには徳兵衛さんの心を慰め、二つには馬の魂を慰める爲に、寄附金を募り「馬頭觀世音」を建てました。

この事があつてから、幾十年馬の病氣や怪我について祈願をこめると、不思議に御利益があると言ふ事です。

## 一四　穴池の大蛇

それは或夏の日の午後だつた。うだる樣な暑さに身の置場所もなく、足にまかせて訪れるともなく、とある古老の宅を尋ねた。

老ひたる身は、見るからに痞せて居て、此の暑さても却つて涼しい樣にさへ見受けられた。

「どうです、面白いお話はありませんか。」

古老「毎々の日照りで、それぱかりが苦になつて話どころぢやないよ。」

「さうですね、この分では田も植わりさうもないね。」

古老「駄目だ駄目だこんな時こそ貯水池か大きな沼でもあつてくれゝば大助りだが。」

「弱つたものですね。」

古老「今考へて見れば、あの穴池だつて埋立てしないてあの儘にして置けばよかつたにな――」

「穴池」「穴池！」

「面白い名だね、何か理由があるのですか？」

古老「あゝそれに就いてはね。」と、白銀の様な睫毛をしばたゝき乍ら、次の様に呟やくのでした。

「さうさ、今からずつと昔の事、儂が子供の頃だつたよ。よく老

人から云ひ聞かされたものだつた。あの御諏訪様の東北の方面が一帶の荒地で、其處に池があつたさうだ。其の池は、大昔隨分廣くて深かつたと言はれて居たが、段々と狹められて來た。今は此の邊一帶の地を穴池と云つてゐるが、此の「穴池」と云ふ言葉は狹くても非常に深く、陷ち込めば穴の底の底までも引込まれるものだらうよ、今でこそこの附近は豐沃な田や畑と變つて居るが、今から五、六百年も前と言へば恐らく薄氣味惡るい程の荒地で、土地の高低は勿論のこと、樹木の繁みは想像以上であつたに相違ない。さうした中に池の水がどんよりと不氣味な沈默を續けてゐたものだらう。

其のうちに、此の池の中に、それはそれは恐ろしい大蛇が棲む樣になつた。

否ずつと前からゐたのを知らなかつたのかもわからない。ところが此の大蛇が段々と齡を經て來るに隨つて、人々の迷惑になる樣な

惡事をすると云ふことでなァこれは何とかしなければなるまいと、寄り寄り相談した。そして此の大蛇を退治して仕舞ふ事に定つた。それから下町の人達が隨分と苦心した擧句、漸く之を退治したのぢや、ところが見事打取つては見たもののどう始末してよいかそれに困つてしまつた。思案の末、萬が一の祟りを恐れて、これは氏神の諏訪神社にあづけた方がよからうと云ふ事になつて、此處へ奉納することになつた。斯うして大蛇も神に祀られたとの事ぢやよ。」こゝまで語つて來た古老は、「ごくり。」と、喉を鳴らしてから尙も言葉を續けるのであつた。

「御覽になつたかね、毎年の年の始めの神社祭に町の人達が年中行事として必ず拜殿の上の所に、大蛇の姿に似せた大きな七五三繩の擧げられてあるのを、あれは此の時の大蛇の靈を慰め樣との氏子の心遣ひからぢや。いや昔の人は實に感心なものぢや。」と、語り終

へた古老の瞳は回顧の情一際濃く光り輝いて居た。

「或程ね、穴池！」不思議な名と思つたら矢張りそうした面白い謂れがあつたんですか、暫く四方山の談笑に時を過して私は歸つた。

× × × × ×

數日たつた或る日、此の不思議な傳説を抱擁して默してゐる穴池の地が、たまらなく知りたくなつた。そこで心ある者と共に尋ねて見た。

そこは全く私達の豫想もつかない所だつた。古老の云ふ御諏訪様の東北には違ひなかつた。詳しく言へば東北二、三百米の川掘の南側て汽車道の北十四、五間と離れない處、川掘に添ふて廣さ十坪餘の畠地がそれであつた。

尚一段と低くなつてゐる此の畠地の隅に三角形に尖つた一坪足らずの叢がある。此處が穴池の名の發生地であり、穴池の傳説を秘め

て來た最後の姿でもあるのだ。流石に此處だけは、せめてもの名殘りにと拓かれてゐなかつた。蛙の憩場所としては絶好のところだ。

こんなにも變つてしまつたのか……

『嗚呼、これか、此處が「穴池の大蛇。」の傳説を生んだところか』

誰かが重ねて云つた。

しばし茫然！漸く迫る黄昏時踵を返して歸路についた。

× × × × ×

又一説には「お手洗の池」に出て來る、飯玉八郎といふ人が彼の大蛇を退治した砌。其の大蛇の頭部は飯玉神社に、尾部は下町諏訪神社に奉納したものとも云はれてゐる。

何れにしてもこの御諏訪様は、餘程蛇には關係したことがあると見える。

## 一五　正六の淺間山（千間山）

傳說の國土上毛野は又、古墳多き國である。

其の昔、崇神天皇の皇子豐城入彥命は、東國を鎭めなされる爲に此の毛野の原野にお降りになつた。

大和朝廷東方發展の根據地毛野の國は、又當代文化の中心地であつた。古墳の國上毛野。

國一帶に散在する數多い古墳の姿は、文化史上に燦として輝く、古代毛野文化の名殘である。

古墳文化の發達は此所、倉賀野の町にも名殘を留め、此の邊り、淺間山、大鶴卷、小鶴卷等、合して一大古墳群を成してゐる。

町を西に出外れて約五町、中仙道を左に折れる細い田圃道を辿れば淺間山にわけ入る事が出來る。

淺間山古墳。

面積一町二、三畝、南方烏川に面し、前方の高さ二十二尺、後圓部四十六尺、全長約五百八十尺に及ぶ、規模雄大な前方後圓の舊態も其の儘、封土は二段、水田に變つた周圍に猶壘の名殘が窺はれ、發掘の形跡をも見られぬ此の古墳の姿は、眞に美しく、得難い尊さを持つて居るのである。

遠望針坊主を思はせた山肌も、眼の邊りに見る時、それは優しい新綠の山であつた。前方部は開墾されて畑地となつて居るが、大部分は雜草に混つて小笹が簇生し、後圓部の頂は松、樅を圍んだ櫟の林である。わけ入つて切株に腰を下せば、足元に、赤い柑子、りん

だうの紫も慎ましく、思ひは暫し上古の昔を駈けめぐる。だが傳はらざりし言傳へは、世の人に様々な寂かな追懐の自由を許して存するのみ、その時代詳かならず、葬られし人の名も定かならずこの古墳の姿にして、それは眞に惜しい事であつた。

だが古墳發掘に就て、此の邊りの人の口の端にのぼる言傳へは興味深いものがある。

「何でも澤山の寶物が埋まつてゐるさうで、それを掘つた人は目が潰れ、片輪になり、又は病死するのださうです。それで今はもう誰も掘らうとするものは居らない。」と言ふ事である。

古墳は神秘である。

だが時の流れは、此の古墳史の上にも、稍々確かな言傳へを殘して行く事を忘れなかつた。

新田氏と淺間山、此の二者の縁は、此の地を巡つて、名殘の跡を留めて居るのである。

「藤島の一戦は、悲運新田氏一族の滅亡となつた。其の義貞の伯母なる正六位尼僧某、が此の地に來りて此の古墳の低い事を思ひ周圍より土を採つて盛り上げ、一層高さを増し、頂に庵を立て、住居せしとか。此の邊を正六と言ふも、それに因みたるものであらう？」

縁は奇しきものである。

新田氏の名殘りを探ねつゝ田圃を中仙道に戻る。再び町に向かへば右下正六に通ずる道の傍に一の橋があつて、「姥ケ橋」と言ひます。姥は伯母より轉じたものであらうか。此所にも、新田氏と此の地の縁深きを思はれ、敢へて虚言とのみは思はれないのである。

千間山を淺間山とも書く、その語源に就ても傳へ言ふ所がある。

其の形富士山に似たるに依り富士淺間と云ひ、後世之を單に千間山と呼び馴らして今日に至つたのである。其の當時倉賀野は、附近に人家多くしてこの郷の源であると言はれ、後世今の倉賀野の位置へ發展したものである。

更に傳ふ。

山頂に千間社と言ふ神社を祀りましたが、明治十三年、倉賀野神社境内に移轉し、淺を千と呼び變更したるも其の爲なのでせうか？

× × × × ×

古墳淺間山を巡る、數多い人の言傳へは、かうして今に猶殘つて、この邊りに鍬取る人の口から口へと語りついて居るのである。否更に語りついて行かれる事であらう。

正六の淺間山。

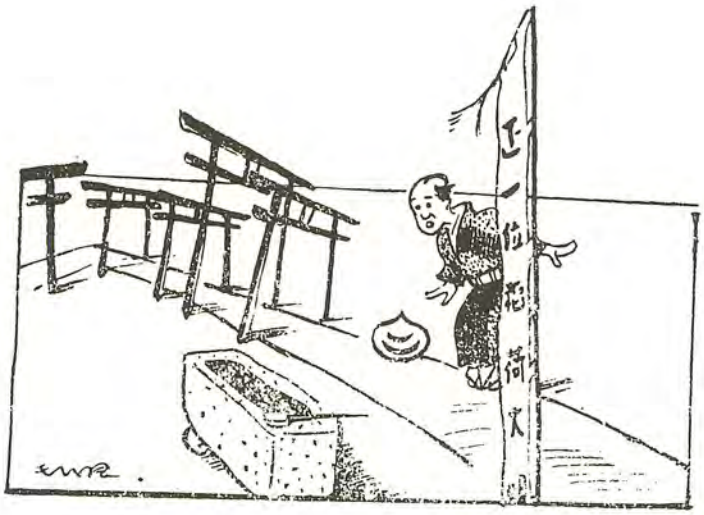
奇しく、美しき、古墳千間山は、倉賀野の誇りてあり、上毛野の誇りてある。

## 一六　三光寺稲荷

其の昔、三光寺様は養報寺の隠居寺でありました。

其の頃は、今のお宮より、もつともつと大きな立派なお寺であつ

たさうです。所が、夜になると白い狐が、お寺の廊下にゐたり、又は人を化かしたりするので、大邊困りました。其處で、町の人達はどうしたらよからうかと毎日の樣に考へてゐました。所があるお百姓さんの考へで其の狐をお祀りする事になりました。




其の頃の江戸、今の東京へ行つて正一位冠稲荷と言ふ立派な位を戴いて來て、お宮を建てゝお祀りすると、不思議にそれから白狐が出なくなつたと言ふ事です。

其のお宮が出來て間もない頃の事です。今の横町の邊に清次郎さんと云ふ一人のお百姓さんが住んで居りました。

大變心掛のよい清次郎さんは、朝早く働きに出掛る前に雨が降つ

ても風が吹いても、必ず三光寺様にお參り致しました。

或朝早く、何時もの様に拜みに行きますと、お稲荷様の石段の所に、きれいなお星の玉が落ちてゐました。

清次郎さんは、「これはお稲荷様が下さつたのに違ひない。」と、大切に家へ持つて歸りました。

其の事があつてから、清次郎さんは大變なお金持ちになつたと言ふ事です。

然し時の移り變りと共に、何時しか清次郎さんのお家は、なくなつてしまひ、今はたゞ其の昔に斯うした言ひ傳へがあつたと言ふ事を殘してゐるに過ぎません。

# 一七　榛名入沼木部駿河守奥方の位牌

倉賀野を烏川一つ距てゝ南に阿久津村、この村に續いて木部村がある。今から凡そ三百五十年程前、此處に木部駿河守範虎と言ふ殿様があつた。そして烏川以南の地に其の威勢を振つて居ました。ところが丁度此頃、甲斐の武田信玄が次第に上野國に軍兵を進め、深澤、吉井の砦を落し、河内、鹽川城も續いて落し、更に木部、山名根小屋に迫つて參りました。此の事を逸早くも豫期して居た箕輪城主長野業政は、やがては我が居城にも此の勢の及ぶことを恐れて、萬全の計を立てたのであつた。取分け衆目を引いたのは、業政に十二人の娘があつたが、夫々近城に嫁がせて縁先とした事である。そして業政が芋蔓の恋となつて、其の蔓の先には數多のふくらみを持

たせて、其のふくらみ卽ち腹臣を手中に收めてゐた。木部駿河守もそのふくらみの一つであつた。業政の第九娘を嫁として入れたからである。

斯うして武田方に對する警戒は少しも怠らなかつたが、智勇兼備の猛將信玄の大軍を迎へるには淋しかつた。此所木部城にも漸く憂色の濃きものがあつた。武田方は連戰連勝の威勢をもつて愈ゝ激しく攻めたてゝ來た。

最後の運命が刻々と迫る。

流石に木部城も衆寡敵せず押寄せる大軍を防ぐに術なく、城兵は討死或は四散し、あはれ城主木部駿河守範虎は城と運命を共にしたのであつた。城主卽ち夫の自刄！早くも急を知つて其の室業政の女は幾人かの腰元に侍かれて、暮色漸く迫る黃昏時、父母の居ます箕輪の城へ、歩みも重く馴れぬ夜道を運んで行つた。戰きやつれた身

と心とは、ともすればよろめき勝ちであつた。

一國一城の奥方若妻が人目を忍んで落ちて行くのである。

極度の心身疲勞も、せめて箕輪迄行けば……と言ふ目的があればこそ續くのであつた。漸く箕輪の地も近くなつた。途中武田方の嚴しい警戒も避けて芝村まで來た時だつた。

女は愕然色を失つた。力なくよろめいて腰元に抱へられた。そして女の吐息は熱く大きかつた。

嗚呼、運命の皮肉さ！折角此處迄歩み續けて辿りついたものを、今一息と言ふのに懷しい父母の居ま

す箕輪の城は、炎々火を吐いて天を焦してゐた。

箕輪城十五萬石落城最後の瞬間である。

乾き切つた女の眼からは涙一つ出なかつた。

夫駿河守範虎が城と運命を共にしたのもつい先程の事だつた。其の一つでさへ負ひ切れない痛手であつたのに、懐しい城は今目前で紅蓮の焔に包まれてゐる、あの猛焔に逃げ迷ふ將士の姿も浮べて見た、否それよりも、もつともつと深刻なものがあつた、父母の最期である、夫の死、父母の死、そして城は燒盡された。

儚い自分の運命をどれ程頼りなく思つた事でせう。選ぶべき道は自ら定められたに違ひない。力なくなく脚を運ばせ、箕輪の城も側に見て、何時とはなしに榛名の湖水近くに來て居た。

湖水の邊に立つて澄切つた湖面を如何に美しく、心ゆく迄凝視して居たことか。

父母の死、夫の死、今の悲境、そんな事は總て遠い昔の夢になつて居た。神の樣に澄んだ心になつて居た。然もどこまでも空虛であつた。

風一つない湖面は滿々と水をたゝえて、其處には逆に寫る女の姿があつた。

不思議！不思議！　其處に寫つた女の姿の下半身は全く龍體に化してゐたてはないか。

そして此の龍體蛇體が女にとつてはたまらなく戀しく思はれてならなかつた。そこで到々その姿を慕つて湖底深く入つて行つて仕舞つたのである。

× × × ×

二人の腰元は大變忠義な者だつた。奥方が湖水に入られたのを見て、愕き且つ悲しんだ。

何時まで待てど暮せど奥方の姿はもう二度と見出す事が出來なかつたのである。二人は悄然と湖面を凝視してゐたが、やがて相談でもした様に音もなく湖中へ入つて仕舞つた。

奥方は龍に化身したのである。そして榛名の湖の主となられたのであると言はれた、二人の腰元は蟹となつたのである。そして今でも奥方に附添ふて居るとか傳へられてゐる。此の奥方は龍に化身したところより「龍體院殿天生澄眞大姉」と位牌の表に記され裏面には「榛名入沼長野氏娘」と書かれ今倉賀野町永泉寺内田口家のお位牌堂の奥深くに秘められてある。

又一説には

奥方が腰元を連れて榛名神社に參拜した事があつたと言ふ。

其の時、湖水近く休んで居ると、急に湖の水が欲しくなつて、近づいて呑まうとすると其の儘すぐ〳〵と中へ入つて仕舞つた。これ

を見た腰元は大變驚いて、附添ふ者の申譯なさに、歸る事も出來ないで湖水に入つて蟹となつた。そしてせめて湖中でも清め樣と言ふので湖中の木の葉等を挾み出して居たと言ふことである。

此の云ひ傳へを聞いて近くの村人達は、榛名山へ登る時、蟹を食べるとそれから五ヶ年間登山は出來ないとか、若し蟹を食べて五ヶ年たゝないうちに登山したり、神社に參拜すると、その一身一家に必ず祟りがあるとて、今でも非常に愼んで居ると言はれて居ります。面白い言ひ傳へもあつたものです。

(19)

正六お堂前墓地

(18)

倉子獅の屋子田

(る祠に内倉)戸　井　　同

幡八戸井 (20)

(21)「水難よけの柄杓」と
物語を残す河流

(23)
安樂寺
正面御堂の中に
七佛あり

(22)
現今の太鼓橋

# 一八　田子屋の獅子

「お獅子」を知つてゐるでせう。あの笛や太鼓に合せて身振手振面白く舞ひ狂ふ獅子舞は昔と云つても、明治の始頃より田子屋にあつたのださうです。

恰度其の頃、大江戸を荒した恐ろしい疫病が次第に擴つて、とう〳〵此の倉賀野の町にも及んで來ました。

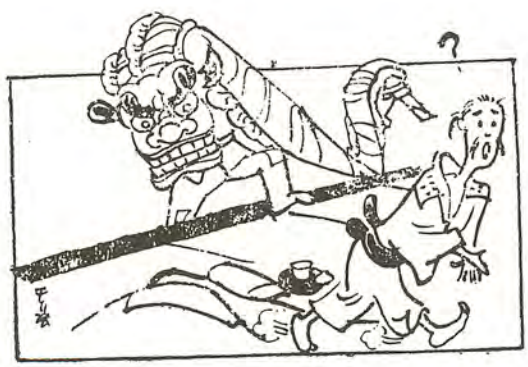
まだ世の中の進んでゐない頃、よく「ちよん髷」を結んで往來を通る頃のことですから、勿論、醫學や衞生が進んでゐる筈がありません。ですから町の人々はどうする事も出來ません。

今日は上町の誰々、今日は下町の誰々と死亡した人の名が次々と傳つて、人々の心を暗くするばかりでした。人々は固く表の戸を閉

ぢて唯々神や佛に祈つてばかりゐるのでした。町人の顔色には生き生きした色も見られず、町全體には死の影が附き纏ひ暗黒の氣が漂ふかの樣でした。

此の時、田子屋に五作さんと言ふ物知りの爺さんが「こんな時には、あの獅子舞をして、人々に元氣をつけ、又獅子犬王の御力にすがつてはどうか？」と、發起しました。

人々は勿論「こんな惡戯の樣な事で、どうなるものか。」と、思ひましたが、此の場合、他に何の方法もありませんでしたので其の言に從ふ事にしました。



其の日が來ました。田子屋の人々は早朝より勢揃して準備を終へて、田子屋區域中を一軒殘らず舞狂ひ、土足で勇ましく、他人の家

まて上つて惡魔拂ひを夕方まで行ひました。人々の心は神佛にすがる心の外に、強い何物かが乘り移つた樣に、光明が照り輝きました。其の爲か、あれ程猛威をたくましくした疫病も、遂に田子屋には少しもはやらず、一人の病人も出ませんでした。

それからと言ふものは、年に必ず一度乃至は二度づゝ出して、古式に則つて舞ふとも聞いてゐます。

此の風習が今の世にも及んで時々町の祭りの時などに獅子舞を致して居ります。

一說には、此の獅子舞によつて雨乞ひをすると不思議にもよく雨が降つたと、言ひ傳へられてゐます。それ故に四月とか十月の獅子舞ひの常例の外に、臨時に、雨乞ひの爲めに舞をすると言ふ事です。

## 一九　正六お堂前の墓地の由來

正六には、淺間山を巡つて傳說が少なくない。お堂前の墓地が其の一つである。

淺間山に入る田圃道を右に折れると稍々廣い田圃道となる。其の道の傍に、此のお堂は、鎮座ましますのであるが、何しろ風雨にたたかれ、時に野良犬の宿ともなる此の祠の姿は、哀れに傷ましいものがある。屋根、扉、濡れ縁、柱、その一つ一つがすべて値打のある骨董品である。だが素朴な村人の尊心は集つて、お堂であり、墓地である此の地に、美しいものを作り上げて居る。此のお堂前が墓地になつたに就いて傳はる言はれが面白い。

淺間山はもと村人の共有地であつた。南方から此の山に入る道は、

又墓地への道でもあつた。

當時此の村人の遺骸は皆、此所に葬られる事になつて居たのであつた。道を挾んで兩側に立ち並ぶ墓石は皆、村人のそれであつた。

猶此の邊りは、藪あり、谷あり、繁みあり、荒涼宛然の原野であつた。暗夜には狼が出たとさへ言はれるのである。

而も飢えた狼の群は、埋めた村人の死骸を掘り出して了ひ。困り果た村人の衆議は一決して、墓地の移轉と云ふ事になつた。かうして墓地は現在のお堂前に移されたのであつた。

だが其の後も引續き村人の間には、惡事奇怪事が絶へないので、再び相談の結果は、村人共有の此の山を、他へ渡して了はうと云ふ

事になつて、山は永泉寺へ納められたのである。

お堂の眞直裏、東向きに、高さ七、八尺幅三尺ばかり、自然石を利用した碑の樣なものが立つて居るのが見られる。正面に廻れば石を刻んだ「御嶽座王大權現」と言ふ文字が見られる。此のものの、得も云はれぬ不思議な力强さに心引かれて、道行く人は、皆此の前に足を留めてから行く。

傳へ聞く所に依れば、此の碑は、慶應四年正月吉日、淺間山の頂にある一本の樅の木の根本に建てられたものであると言ふ事である。再び墓地の物語にかへる。

奇怪な山の所有權を、寺に納めてからの村人は幸福でありました。だが一旦抱いた村人の恐怖心を一掃するには未だ一つ、仕事が殘つて居た。祟りを恐れる村人は、此の大きな石の塊をも、お堂裏に移して了つたのであつた。それから村は、全く平穩になつたと云ふ。

事の眞僞は問はず、奇しき言はれは今に猶お堂前の苔むす墓石に殘つて、世の人の好奇心をそゝつてゐる。

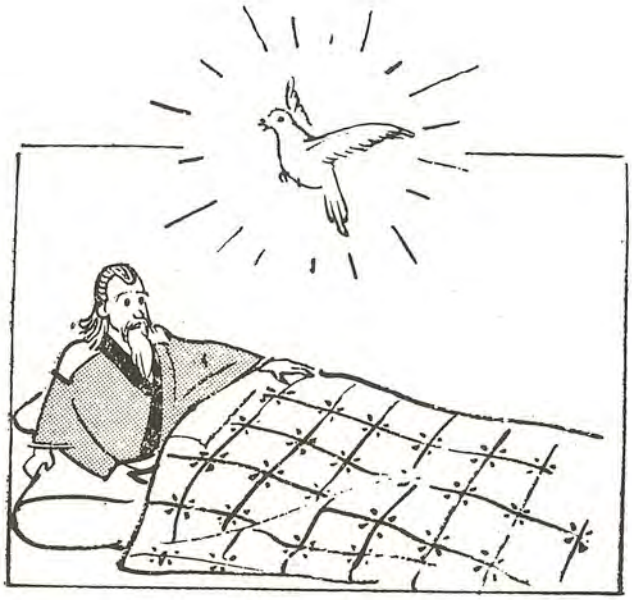
## 二〇 井戸八幡

もとは木部城主に仕へて居た田口次郎左衞門辰政も、今は官を退いて年久しくなりました。寄る年波に頭髪も白さを增して參りましたが、日頃心穩かな辰政は、何の苦もなく其の日を樂しんで居りました。

辰政は、大變神信心の厚い人でした。

或日の事、今日も一日の仕事を終へて、鍬を肩に我が家へ來かゝりました。すると、一羽の鳩が舞ひ込んでまいりました。不思議に

思つて鳩を見守つて居りますと、二度三度輕く舞つた鳩は、さあつと屋根に止まりました。ぴかつと一條の光が眼を射つたかと思ふと、鳩の姿はすうつと消えてしまひました。



餘りの不思議さに強く心を打たれましたが、辰政は唯心深く秘めておいて誰にも語りませんでした。

その年も暮れて新しい年を迎へました。正月の二日、辰政は再び不思議に襲はれました。深夜一羽の鳩が現はれて辰政に向ひ「お前は私を知つて居るか。」と、言ひました。そして又も燦然と光り輝くと見る間に、一條の淡い光を投げて、古城三の廓のほとりへ飛んでゆきまし

た。

それから幾日か過ぎた或日、夜中に大地震がありました。ごうつと物凄い響が古城の方向から聞えて來ました。辰政は益〻不思議てなりませんでした。翌朝農夫が、三の廓のほとりに、清水が湧いてゐると報じて來ました。辰政は日頃神のお告げを思ひ出し、急いで現場へ駈けつけました。すると清らかな水が、こんこんと音をたてゝ湧出して居りました。其の後、この清水はどんな日照りの時にも絶へることがありません。渇を覺えて其の水を飲むと、不思議に何とも云へない爽快な感じになりました。病氣の人が飲むと忽ち全快してしまひました。それから誰云ふとなく、これは御神水であると言ふ事になりました。

或時、村の人がこの井戸替をすることになりました。處がいくら汲み出しても水が盡きません。とうとう井戸替は中止することにな

りました。

其の時一人の村人が猶どの位水があるのかと中を探つて見ますと何だか硬い物が足にさはりました。拾ひ上げて見ますと何とそれは八幡大菩薩の尊像でありました。この尊像は其の昔、倉賀野城主が兜の八幡座に收めてゐたものでありました。

この尊像の爲めに、水に不思議な靈驗のあることがわかりました。これはおろそかに出來ないと思つて、社を建てゝ祀ることになりました。

これが井戸八幡の社です。

一說に云ふ。

井戸八幡の井戸の中へは、倉賀野落城の際城の寶物たる卷物を投げ入れた。と。

## 二一　水難よけの柄杓

佐野から烏川が倉賀野の方へ廻り込む所を萬福寺と言ひます。その萬福寺には昔大きな寺がありました。その寺の名が何時か土地の名となつたのでせう。その萬福寺の下は烏川の水が曲り込んでとうとうと流れ、それが又深く淀んで物凄い底知れぬ青さをたゝへてゐました。

こゝを通りかゝる船は時々其の波に呑まれて沈みました。ところが此の船が沈むに就いては不思議な事が有りました。

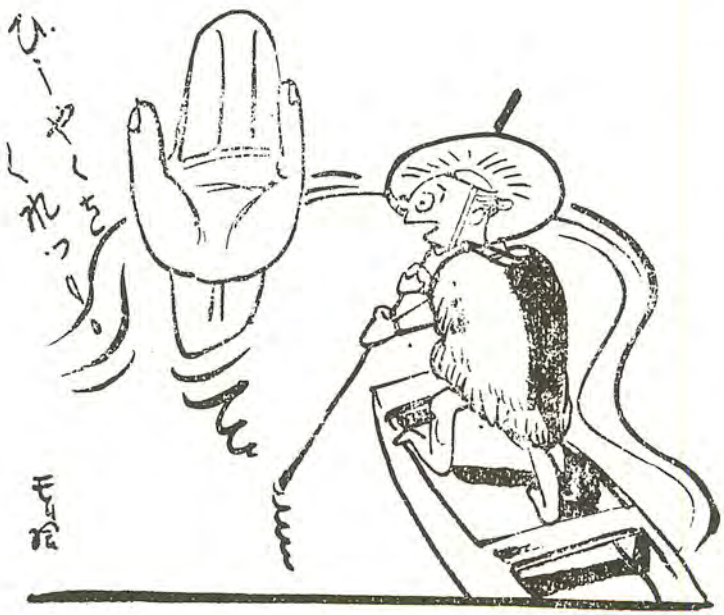
丁度船が此の寺の下へ差しかゝると、何處からともなくボシャンボシャンと言ふ音がして來ます。

其の中からぬうつと、大きな手が出ます。そして不氣味な聲を出

して「ひしやくをくれ、ひしやくをくれ」と言ひます。そして船頭が柄杓を與へると、それを受取るやすつと水の中へ姿を消してしまひます。

やがて船が深く淀んだ淵に差しかゝると、又しても何處からともなくボシャンボシャンと水音がして、遂には船をも呑んでしまひます。柄杓を與へない時には大きな手で船端を持つて船を覆してしまひます。

かうした事件が次から次へと起りましたので船頭達は魔の淵と呼んで其處を通るのを避けました。すると或時、大變物好きな人が居りました。



「よしよし自分が一度うまく其處を通つて見せやう」と一つの柄杓を用意して底を抜き身仕度も甲斐甲斐しく出掛けました。

船が淵にかゝると、果して「おういおうい」と、呼ぶ者がありました。振返つて見ると大きな手が水の上にぬうつと出てゐます。そして「ひしやくをくれ、ひしやくをくれ」と、薄氣味惡い聲が聞えるではありませんか。身の毛もよだつ程の恐しさをこらへて、かねて用意の底抜け柄杓を與へました。大きな手はすうつと、なくなりました。

やがて船が淵にかゝると果して「ポシヤンポシヤン。」と、言ふ音が聞えて來ましたが、不思議なことに唯飛沫が飛ぶだけでした。船は無事に淵を通る事が出來ました。安否如何にと噂とりどりに待ち構へて居た人々は、今無事に歸つて來たのを見て非常に驚きました。

其の後、此の淵を通る人は必ず底抜け柄杓を持つてゆき淵へなげ

込む様になつたのです。

## 二二　太鼓橋

話は徳川の昔に遡る。享保三年と云へば紀元二千四百六十三年で今より百三十年前の頃である。

其の頃でも倉賀野の宿は隨分繁昌して居たと言はれて居る。

エイホーエイホー駕籠が行く、道中笠の旅人の群が幾群となく過ぎて行く、斯うした旅人を相手にした商賣が軒を連ねて賑はつて居たのである。

此の賑やかな宿に相應しくないものは宿の中程に架けられた、み

すぼらしい土橋の姿である。大水の出る時など、何時も流されてしまふのであつた。

宿場の傾城達の美しい醵金に依つて此の土橋を立派な橋に改築しやうと言ふ事を、時の道中奉行の殿様に願ひ出した。

其の頃は傾城の數も貳百人にならうと言ふ豪勢さてあつたと云ふ。

御奉行様は大變御喜びになつてすぐ御許しになつた。

お江戸の名高い石工で江戸太右衛門と言ふ人の手で石橋の工事が始められた。其の頃にない大工事で八月には立派に完成した。之が太鼓橋である。當時の人々はメガネ橋とも言つて、中仙道の數多い橋の中でも二つしか無いと言はれた程立

派な作りてあつた。其れから星移り月變つて百三十餘年。今殘つて居るものは後に架け替へられたものであるけれども、橋臺石積の一部には當時の面影が僅かに跡を留めて居る。

## 二三　安樂寺の七佛藥師

今より凡そ千二百年程前、人皇四十五代。聖武天皇の天平九年に、行基菩薩と云ふ大變お偉いお方がありました。此の人は大變情深いお方で、世の中を旅をしながら困つた人を助け、惡るい人を戒めたりして、此の中仙道を歩るいて參りました。丁度此の町の安樂寺前まで來た時は、日はとつぷりと暮れ、夫れに雨さへ降つて參りましたので、宿を尋ねたが其れらしい家もな

く、さあ如何しようとお考へになりました末、丁度折好く其處に藥師の岩屋がありましたので、其の中で一夜を過さうとなさいました。

穴の中へ入つて休んで居て急に佛像を彫る事を思ひ立ち、一心に刻みました。そして一夜の中に七體を刻み上げ、八體目に取り掛らうとしますと、東の空が靜かに明けて參りました。行基菩薩は仕方無しに、七體と後半分の像をお殘しになつて、東の空が美しく染めかけた頃、又旅立つて仕舞ひました。

「又一說に、行基菩薩樣は巳の年生れてあつたので、蛇になつて今でも穴の中に住んで居るとの事て

す。」今も尙藥師の岩屋には昔を偲びつゝ行基菩薩の御德を讃へて、七體の御像が飾ざられて有ります。そして十三年目毎に、その藥師の岩屋を、お開きになつて、盛大な催が行はれますが、今より凡そ百五十年程前の事、十三年目毎に來る御開帳をどうした譯か、延ばした事がありました。其の年には倉賀野の人々にチフスや、赤痢等が流行して非常に困りました。かうした病氣の爲に町の人々が尊い命を失つて行きました。此の當時、安樂寺に和尙さんをして居られた方は、「火の病」と謂ふ病氣になつて、もう體中が燒ける樣に痛くなつて苦しみ跪きました。側に付いて居た人達も手の下し樣もなく、もうこれ迄と思ひ、どうせなき命ならばと、水をどんどん汲んで來て、苦しみ跪く和尙さんの身體にかけました。けれど幾らかけても元の樣にはなりませんでした。そして到々此の世を去つて行かれました。

又倉賀野の人々も其れが爲、澤山亡くなつて行つたと云はれて居ります。

「是れは不思議な事だ。」

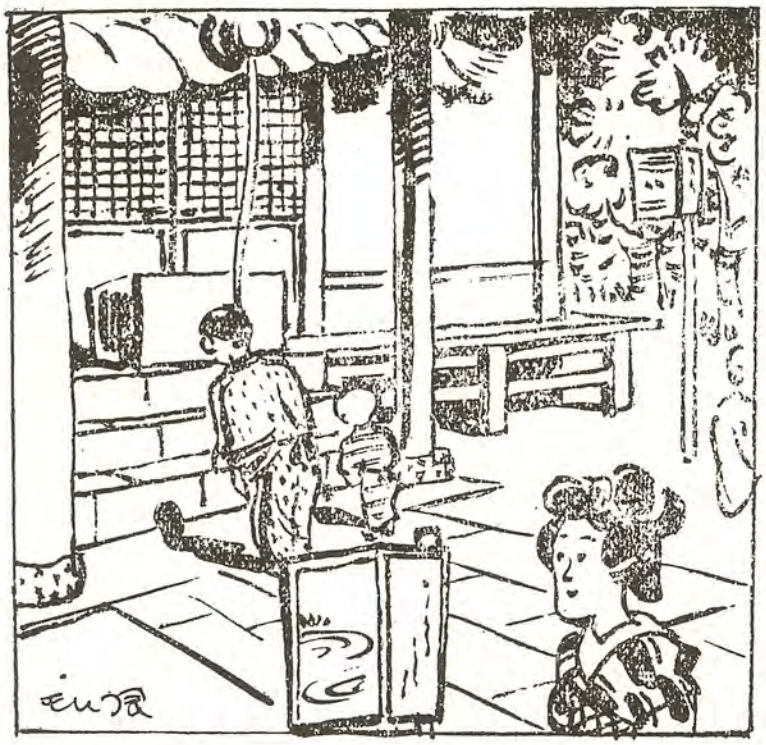
「一體、何の祟であらう。」と、漸く人々も眞劍に考へる樣になりました。其の中に誰云ふとなしに「これは十三年目毎に開く藥師の岩屋の御開帳を延ばした爲ではないかなア……いや其れに相違ない」と云はれる樣になりました。此れには誰一人として返す言葉を持ちませんでした。すると和尚樣は、「あゝそうでせう。其んな事をしてはいけない事だ。」と、云つて、其れからは少しも延ばす事なく十三年目毎に御開帳を行つて居ると云ふ事です。

# 二四　閻魔堂

上州のからつ風は南端の倉賀野の宿に來ても名物である。赤城颪と言ふよりも寧ろ淺間に近い冷い風が、吹き初めると三日位は必ず吹き募る。坦々とした中仙道のアスファルトを風は尙速く滑べる。家々の軒を搖すり砂を捲いて風は隼の樣に一本の街道を行く。その風がこの宿を貫ける處で流れる樣に二本の道を描いて、右に左に又新しい砂を捲いて走り去る。右中山道、左日光道その追分に風に搖すぶられて立つのが冬の閻魔堂の姿である。明治の末頃までは お作さんと言ふ尼さんが留守をして居たと言ふこの御堂も今は堂守さへもゐない。

ほの暗い堂扉の中には微かな佛像の御姿と、思ひがけなく人目を

ひく紙の白さがある、それをよく見れば一體の佛像の御手にする闇魔帳の白さなのである。神秘を包む御堂である。御堂の左手に一基の常夜燈が建つて居る。その前の道標にも其の常夜燈にも達筆に書かれて居る様に、此處が中仙道と日光道との分岐點になつてゐるのである。行燈の灯もちらほらと細い場末の追分に常夜を照らす此の御燈は、さらてだに昔の姿を思はせる。昔も又其の昔もどれだけの人々が有明の旅、無明の旅に其の御光に浮び上つて



は消え又去つた事であらう。

夢見る様な追憶も又懐しいものである。其の臺石の四面には文化年間だと言はれる此の建立の關係者の芳名が、數へ盡せない程彫刻されてある。名を知られた人も數多くあるとの事である。

裏面には江戸大相撲一行の名も見える。當時大相撲がよく興行されて賑ひ、特に横綱名力士雷電爲右衛門等の尊信を集めた等の傳説をうなづかせるものがある。

夏は八月十六日が縁日である。古文書に「閻魔王の御利益效顯著しく其の名、近郷數里に轟き善男善女の參拜するもの踵を接す。」と、見えてゐる様に、現今になつても夏の宵に打連れて參拜する人は道を埋め堂を埋める。現在此の堂宇は九品寺の所有であつて御本尊は阿彌陀如來なので阿彌陀堂と言ふのださうだが、何時とはなしに人呼んで閻魔堂と云つてゐる。其の由來は文獻古老の言をかりても知

る由もないのであるが、其の昔死刑囚の首を晒首にして此處に立て、其の亡靈を慰める爲に堂を建立したのではないかと言はれてゐる。堂の西側にある常夜燈は、日光までにある五つの中の最初の常夜燈であると。

## 二五 天神の松

世は戰國。下剋上、諸國の武將互に鎬を削り、覇を天下に示さんと大兵を擁して、人馬の動き物々しく、具足に身を固めて駈廻る時であつた。

甲斐に起り、信濃に上杉謙信と地盤を爭奪した武田信玄は、四方を蠶食し其の覇を我が上州にも延し、ジリジリと南方より神流川を

渡り其の先鋒は烏川を隔てた對岸の山地、根小屋に砦を築き上州經營の計を立て、隙あらばと待機して居た。

倉賀野も目睫にあつて正に虎視眈々の地であつた。

やがて來るべき運命も迫りつつあつた。城主金井淡路守も、城門かたく鎖して常に之に備へて居た。武田勢何者ぞ！之に一指も染めさすものかと、警護の武將を下知して怠らなかつた。

遂に時が來た。

それは闇の夜、妖雲低く垂れこめて、颯々と吹く風は雨を呼び、雷鳴さへ伴つた。

天雲益々深く、物凄き雷光、篠つく豪雨沛然として降りしきる烏

(24)
閻魔堂外觀

同　内　部

同　松の舊所在地

(25)
雷電神社に移る
「天神の松」の祠

(27)

るあ説傳の「狢るすに主坊を頭」

觀外寺報養

(26)

んさ婆川頭葬

在現の「近附越の塚」　(29)

川の水怒つて岸を嚙む。

時こそよし！武田方はこの機を逸せず、倉賀野城攻略の火蓋を切つた。烏川の絶壁は容易に城に攀登る事を許さなかつた。

武田方の面々は芋の葉を冠り、烏の濁流を泳ぎ城壁に攀登つて、不意に攻め入つた。

（一説には、蓮の葉に姿をかくして川上から流れ流れて城壁にとある）

倉賀野方も防戰よく勤めたけれども、あまりの不意に術なく、敵に蹂躙されて、武將も多く討死し、あはれ城主は捕へられて、「釜ケ谷」に首をはねられた。

一方奥方は腰元を連れて城外を北へと遁れたが、足弱な女の身の哀れにも、追手の急に逃げる事もならず遂に天神の松の根元に、腰元と共に自害された。

其の時奥方は、雄々しくも、腹十文字に掻切り、臓腑を松の木に投げつけ、

「此の怨みに、この松の蕊は永久に立てさせじ。」と、言つて息を引き取つたと言ふ。

其の後間もなく松の蕊は枯れ、年經ずして枯れ果てた。

それから後幾度か植ゑ替へた松も不思議に蕊が立たず、傘松となると言ふ。

最後の松は大きく擴つて、一抱もある傘松となつたが、明治卅四、五年の頃、心許なくも切捨てられて、今は一片の倉賀野落城の哀話を秘めて、其の影だになし。

又一説に其の松は、敵方に伸びて奥方の怨恨永く、其の松が枝にありしと言はれてゐる。

此の松の木は、今の停車場の北裏、池の西北に當る。

松の根元に天神の石祠があつて、古老はよく其處に額づいたと聞く、今石祠は、中里の雷電神社境内の一隅にある。

一説に

「芋の葉をかぶつて倉賀野城に、たどりついた武田方の一兵は水門を見つけて破る事が出來た。爲に倉賀野城は水攻めに遇ひ、あはてふためく中を城廓に火をかけられたのである」と。

又一説に言ふ。

「城廓に火のついたのは城中の上役に裏切者があつて、火をかける以前、既に武田方と牒し合はせてあつたのである」と。

# 二六　葬頭川ばあさん

「葬頭川ばあさん恐かつた
狸の金玉八疊敷……」

何と言ふグロテスクな俗謠であらう。葬頭川ばあさんと言へば泣く子も騙ると聞いて居るから、餘程恐いものの化身に相違ない。

其の葬頭川ばあさんと狸の金玉とが、如何言ふ因緣のあつたものかは分らない。その獵奇な婆さんの正體と言はふか、偶像と言はふか一目見て吃驚！　頭に眞綿帽子は殊勝であるが、女だてらの大胡床、魔性を含んで物凄く柄になく眞赤に染めた口は逆しまに割れて妖魔を思はせる風體、養報寺の位牌堂の奥深く殘されたこの偶像を訪ねる小心者の度膽を拔くかと怪しまれる。

そも〳〵此のグロテスクの婆さんは、今の役場裏の低地に祠があつて、其處に安置されて居つた事を思ふと、多分奪衣婆とて、三途の河の畔にて亡者の衣を剝ぎ取る老婆ならん……されば懸衣翁と共に死者の衣を取り、之を衣領樹に懸け、其の枝垂下する程度によつて罪業の輕重を定め、罪科重き亡者に裸形の恥を忍ばせながら大王の前に送ると言ふ。何れにしても妖魔の化身、恐ろし〳〵桑原々々……

その昔、字橋東と言ふ地籍

# 二七　頭を坊主にする狢

狢がよく人を化すと云ふ話は、隨分多く聞いて居ります。

お湯の心算て肥溜の中へ入つた話や、饅頭だと思つて馬糞を美味しさうに食べてゐた等、隨分滑稽なことです。

「こんな馬鹿らしい話があるものか。」と、言ふそばから、其の人が又狢に化されて居た等全く皮肉なものも有ります。

是れに似た傳說が、こゝ養報寺の狢にあつたのでした。此の傳說は寧ろ矢中とか中居と言つた他の近村の人達によく云ひ傳へられてゐるのです。

さて一體どんな傳說でせうか。

其の昔、養報寺にも狢が居りました。此の狢は人を化して、頭を

ぐるぐる坊主に剃つて了ふと言ふ不思議な狢でした。そして又限つて人を化すと云ふので、人々は此の狢の事に就いて、次の様に言つて居りました。

「養法寺狢には必ず化される事になつてゐるのだ、若し化されないとしたら、化されない者の方がどうかして居るのだ。」と、そして困つたことには化した後で、必ず頭の髪を剃つて、つるつるにして了ふので此の養報寺近くの道などを、夜遅くなつてから通る者は、全く無くなつたと言はれます。

ところが、丁度此の頃、矢中の若い者が何人か集つて度胸試しをやらうと言ふ話を持ち出しましたが、自分達の村には度胸試しに適當した所がなかつたので、色々考へた末、「それでは、倉賀野の養報寺の側を通つて油揚を買つて來る事にしてはどうか」、と云ひ出す者がありました。「それは面白い、よからう。」と、早速相談が纏まりま

した。

其の夜も十一時を過ぎて居りました。

一番先に當つた或る若者が、「何事があるものぞ。」と、元氣よく出掛けて行きました。集つた他の若者は、歸つて來る迄、色々と雜談に耽つて居りました。

さあ出掛けて行つた若者は、難關養報寺の側も無事に、倉賀野町の下にあつた或る豆腐屋さんへ參りました。

ところが、どうしたことか、此處では家中の者が亂れ合つて大喧嘩の眞最中です。若者は仲裁し樣と思つたが、手の出し樣も有りませんでした。目的の油揚も買ふことが出來ないで、止むなく其の儘、歸つて參りました。丁度若者が養報寺の東へ差しかゝると、後の方から息せきつて走つて來る者があります。

頭の毛を振り亂し、取る物も取敢ず、其の慌て方は並大抵では有

りませんでした。よく見ると、今豆腐屋で大喧嘩をして居たおかみさんでした。おかみさんは、若者の側近くへくるなり「助けて」と、叫んで肩へ跳びつきました。ところが跳びついて間もなく氣を失つて了ひました。若者は驚いて「これは弱つた、これは弱つた。誰か來て來れないかなア。」と、一人呟いて居りますと、其處へ下町と書いた提燈を持つて、五六人の若衆がおかみさんの後を追ふ樣に走つて參りました。若衆は此處に立つて困つて居る獨りの若者を見つけて、

「あなたは今此處へ來た筈のおかみさんを御存じありませんか。」と、問ひかけました。若衆が返事に困つて居るうちに、早くも倒れて居たおかみさんを見つけた一人が「あ！此處に死んで居る、お前が殺したのだらう。」と、言ふと、他の若衆も口を揃へて「さうだお前が殺したのに相違ない。」と、言ふのでした。若者は何の懸合ひも

ない一部始終を語つて辯解したが、若衆は何と言つても聞き入れません。遂には腕を握つて引張り始めました。そして下町へ連れて行くと言ふのです。若者は出來るだけの大聲で

「わしではないわしではない、手を離せ手を離せ。」と、頻りに怒鳴りました。

此の大聲に驚いて養報寺の和尚さんが出て參りました。和尚さんは、爭ひ合つて居る双方の間に入つて、兩方の云ひ分を聞いた上次の様に云ひました。

「何としても此の夜中に、若物一人でこんな所へ來て居ると云ふのが可笑しい。假りにお前が殺さなかつたとしても、さう怪しまれてもしかたが無いではないか、此處で人が一人死んだとなれば、いくらお前が知らぬと云つてもそれでは過されない。儂が下町の若衆へはよく謝つてやるから、お前は今より儂の弟子となつて罪滅を致

しなさい、昔から寺入りをすれば皆罪が赦されてゐる。さあ儂と一緒に寺まで來るがいい。」と、言つて、和尚さんは、其の若者を連れて寺へ入つて行きました。

寺の中へ入つてから和尚さんは、又若者に向つて云ひました。

「お前も今から儂の弟子になるのだ、寺へ入れば勿論頭を剃らなければならない。さあお前の頭を剃つてあげやう。」

斯う云つて若者の頭を忽ちつる〳〵に剃つて了ひました。

矢中の方では、何時になつても出て行つたきり歸つて來ないので、漸く騒ぎ始めました。「さては化されたか、いやそれに相違ないぞ皆んなして迎へに行つて見よう。」と、相談が纏まつて、皆提燈をつけて出掛ける事になりました。矢中を揃つて出る時はまだ眞暗であつたが、あの大きな堤の近くへ來た頃は、夜もほのぼの明初めて參りました。

「あれが養報寺の森だ、きつとあの森の中へても連れ込まれて居るに相違ない。」等、歩き乍ら話し合つて來ると、土堤の向ふて「オーイ、オーイ。」と大聲で怒鳴つて居る者がある樣てす。「何だらうあの聲は？」不思議に思つて土堤へ上つて見ると、其處にはつる〳〵に青く剃つた頭を振り立て乍ら一人の男が、腰丈以上も深い堤の水に入つて、それはそれは勢よく縱横に押し歩るいて居るてはありませんか。そして時々「オーイ、オーイ。」と怒鳴るのてした。

よく見るとそれは昨夜出て行つた友てした「一體何をして居るのだらう。」と、一人が言ひまし た。すると他の一人が、

「あの頭を見たまへ、あの頭をさ。」と、言ふのて皆其處へ注意をして見ると、成程つる〳〵の頭をしてゐる。「やつぱり化されたのだ、皆して呼び戻さう。」

そこて若衆達は水の中の若者を一生懸命に呼び續けましたが、何

んと呼んでも、どんなに大聲を出しても平氣なものです、相變らず「オーイ、オーイ。」と、言ひ乍ら押歩いて居るのでした。いくら呼んでも甲斐がないので、終に石や土塊まで投げつけて騒ぎ立てました。

其の後も暫く押歩いて居たが漸く疲れ切つたと見えて、段々靜かになつて參りました。そして堤の端に來た時、待つてたとばかりに摑んで水から引き上げました。土堤の若衆は色々苦心した擧句、漸くの事正氣にしたが、頭のつるくだけはどうしても取り戻せなかつたと言ふ事です。

後になつてから、おかみさんの死んだと言ふ場所へ行つて見たが何の事もなく、又豆腐屋さんへも行つて聞いたが、「喧嘩どころか昨夜は早寝てしたよ。」と、云ふのでした。

「ては養報寺へ行つて見よう。」と、揃つて、出掛けました。勿論養報寺だつて知つて居る理由がありません。

一同が村へ歸つてから、この事を話しますと、「そうだよ、あれにはやられますよ。」

と言つて居たさうです。

# 二八　ちぢり山

まむしが人を嚙じると言ふ事は聞いてゐたが、まむしが寄り集つて、今度は誰が誰を嚙じる番であると、嚙じる蛇と嚙じられる人とが定つてゐたと聞いては、全く驚かざるを得ない。

相談の結果、槍玉に上げられるものこそ、いゝ迷惑である。誰がその相談の様子を突き止めたのか？まむしの血祭りに上げられる者が年に幾人もあつた後の事であらう。

或る夏の夕暮れ、此邊て何時も、まむしに嚙じられるのだと言ふ事を知らない筈はない農夫が、圖らずも其處を通りかかつて、怪我の功名とても云はふか、まむしの相談の場所にぶつかつて了つた。所が通りかかつたと云ふのが、怪我の功名だと思はれた其の瞬間！

眩惑と共に奈落の底にても放り込まれる様な衝動を受けた。

不思議と言はうか、皮肉と言はうか、今度嚙み殺される番に相談が定つたのが、何んと自分てはないか――

彼の足は無意識に、我家に向つて走つたけれども、大地を信ずる事の出來ない程の浮調子であつた。彼は轉ぶ様に家へ歸つたものの只戰いて、狐に摘まれた者の誰もがする無氣味な手振りをするのであつた。

熱が出る。目が坐はる。動悸がする。

かくて一夜が明けた。彼は何思つたか、默々として木を切り、木を組み立てる。

やがて一つの祠が出來た。彼の樣子を側から見てゐたとしたら、全く夢遊病者としか思へない。

その夢遊病者の樣な、彼によつて作り上げられた祠は、その翌々日、甲大道南の地域に建てられた。何の爲に此の祠を此の農夫が、此の地に建てたかは、彼が其の後、あの兇惡な、まむしの餌食にならないで濟んだ事によつて、御想像が願へると思ふ。

此の祠を人呼んで「池鯉鮒大明神」といふ。まむし避けの神として祀られたものである。大明神の祠は、其後下町諏訪神社境内に移されたが、つい此の頃まで毎月一日に赤飯が、町の舊家の手によつて供へられてゐたと言ふ事である。

# 二九　塚の越

倉賀野町が繁華であつた頃には、此の附近の村人は物の大小を問はず、よく買物に出掛けて來たと云はれます。特に町の北に當る矢中、中居の方からは相當繁く通つて居た樣です。

此の中に多造さんと言ふ大變剛膽な人が有りました。どんな事にも驚かないし、人の厭がる事でも平氣でするし、強いて危險な所などへ入つて見たりして、この人のなす事は、全く普通の人から見れば亂暴とも言ひたい程、無茶な事をする人でした。こんな樣ですから、夜など遲く酒を呑んで歸る事は決して珍らしくはなかつたさうです。

此の方がよく倉賀野へ往復する途中に、丁度倉賀野と中居との村

境に「塚の越」と言ふ小高い塚があります。

此處に狐が棲んで居て、往來の人をよく化すとの事です。

多造さんは、斯うした事を聞いては居たが生來向ふ見ずの亂暴者でしたから、わざと其の塚の近くを通つて見なければ氣が濟みませんでした。

或夜多造さんは、遲くなつてから一杯機嫌で此の塚の所へ差しかゝりました。晝間てさへ氣味惡く思はれた所なのに、よるの夜中、如何に一杯機嫌とは云へ、物好きな多造さんです、此處へ寄り道をしたくなつて了ひました。

そして細道へ入りました。すると其の細道の端に秋刀魚が行儀よく並んで居りました。多造さんは「はゝあ！これはきつと狐の大將が並べて置いたに相違ない。」と、云ひつゝ、ぐいと手を伸して秋刀魚を掴むなり、「化せるものなら化して見ろ。」と、頭だけ殘して、皆

食べて了ひました。

其の夜は何んの事もなく歸つて來ました。さうして家の者には勿論のこと、近所隣へまで「狐の大將を俺が化して秋刀魚をみんな食べて來たぞ。」と、ふれ歩きました。

それから二三日たつた或夜のこと多造さんは又此の塚のところを通りましたが、どうした事か其の夜は秋刀魚どころか何もありません。「狐の大將を化してやらうと思つたが今日は先逃げされたかな。」斯う云つて少し歩き出しますと自分の足先二、三尺の處に古い帽子が落ちて居りました。「こんなものが。」と、忽ち蹴上げ樣とすると、

もぐ〳〵と前へ動きます。こん畜生！。」早くも知つた多造さんは近くにあつた生木をねぢ切つて、其の帽子を追ひかけました。多造さんが一足出れば帽子も亦一足分前へ出ます。十間追へば十間逃げ、百間追へば百間だけ遠ざかります。遂に多造さんは一晩中、桑畑と言はず、野道と言はず、ばら藪の中堀の中、躓いては倒れ、起きては躓き、手や足からは血まで流して追ひ廻したが、どうしても追ひつく事が出來ません。もうすつかり疲れきつてしまつた多造さんは暫く休む爲に近くの家へ入りました。何處の家ともつかないが、中は眞暗でした。

其處へ身體を半分程突込んだ時には、何もわからなくなつてすつかり參つて了ひました。

村の方では、多造さんの家では勿論のこと、近所の人々までが、何時になつても歸つて來ないので大變心配をし始めました。

其の夜も明けたが、まだ歸らないので幾人かの人達が、此の塚の越の所まで見付けながらやつて參りました。すると、多造さんは塚の越の狐の穴へ頭を突込んで、一生懸命あやまつて居るではありませんか。

多造さんが家だと思つて入つたのは、此の狐の穴なのでした。流石に剛膽な多造さんもこれにはすつかり閉口して了つたと見え、それからは大變おとなしくなつたと言ふ事です。

## 三〇 淺間山

淺間山古墳の中には金の駕籠があつて、この古墳の周を三回息をしないで廻ると、自然に、其の金の駕籠が出て來て、其の人の所有になる。と、

## 三一　並木

昔、並木に天狗と稱する忍術者が居て、姿を隱して、時折往來の人々をなやまし、惡事を働いて居たといふ。最後は子供の無邪氣さに術が破れて、遂に囚れの身となつたと言ふ。其の昔の並木は隨分樹木も大きく其の繁みも深かつたに相違ない。

## 三二　幽靈石

永泉寺本堂の西に、本堂と並び續いて小さな古めかしい墓石がある。倉賀野城最後を飾つた城主金井淡路守の標である。此處には金

井氏一族、家老等の墓もある様だが、一番西にある見るからに妖氣を漂して、奇怪な感をもたせるものがある。眼も口もあり、鼻さへあるが人の顔とも思はれず、何時何處から見ても自分の顔ばかりをねめつけてゐる様に思はれてならない。誰云ふとなしに幽靈石と言つた。

此の石に付いて和尚さんは、

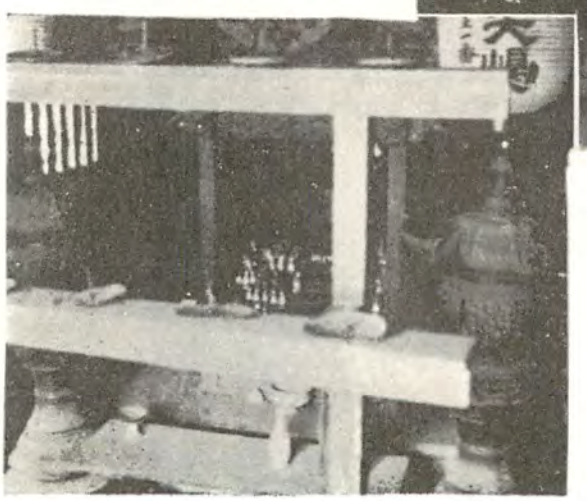
「其の昔、城主金井淡路守の奥方を葬らうとして此處の近くに穴を掘つた。すると丁度、其の穴の中から、此の石が出て來たと言ふのである。自然に出來た物か、それとも誰かが、亡靈の供養

木並松む富に情の古懐　(31)

(32) グロテスクな幽霊石

山寺賀長 (34)

同 稲荷内部



長賀寺稲荷 (34)

にても立てて、それが埋つてゐたものか、兎に角不思議なものです。時折、寺へお詣りに來る者が立上つては何事かさゝやいて居ります。最近では線香の煙もよく立ち昇つて居ります。」と、

又一説に

あの幽靈石を青年が時々持ち出すと言ふのであつたが、不思議な事に必ず又永泉寺へ歸つてゐると言ふのである。和尚さんは、もう持ち出せない樣にと、只今ではコンクリートで、確と取り付けたと云ふのである。

# 三三　人とり橋

朧月夜に見る老松には、無限の詩情があるものだが、老松が女郎松などとニックネームを取つて、薄氣味惡い夜鳴きをしたり、恨めしや――と、亂れた髪の毛を口に咬へ、瘠せ細つた蠟のやうな手を互ひ違ひにして、少しく上目に下げられ、生臭い風を伴つてヌーツトお化の姿に變るとなると、詩情どころか只事では濟まされない。所が、かうした奇怪な松が藪塚の上に二本も在つたと言ふのだから物凄い。

その女郎松の根の屆く邊りに掛けられた丸木橋。これが又人とり橋といつて、事もあらうに寺に通ずる只一筋の橋だと言ふのだから尙更恐ろしい。

何といふ淋しさと、恐ろしい因果の組合せてあらう。どの様な恨みがあつての亡霊か！丁度亡霊の出る頃と。いつても草木も眠る丑満時、何處からともなく聞ゆる鐘の音は、陰に響いて物凄く、川の流も一時は止り、屋根の棟が三寸下る。と、講談もどきの時刻でないだけに却つて妖氣を呼ぶ。かうした頃、その丸木橋を渡らなければならない様に、悲しい運命に引ずられた者は、七轉八倒の苦しみ、地獄にも通ずる呻をあげて、丸木橋から落されて、虚空を摑んで見るも悲惨な形相をすると言ふ。亡霊が人の命を狙ふところを見ると、前世の悪業盡きず地獄の責苦を受ける女の淺はかといはなければならない。事實とし傳へられる女郎松、丸木橋は、今は影だにもなし、

されど此の奇怪な物語りが停車場道に臨む郵便局裏にあつたとか、「人とり橋」これは幅三尺、長さ三間に餘るといふ土橋にして、役場裏を流るゝ川にかけられしと聞く。

## 三四　長賀寺稲荷

正一位大々儀式倉山稲荷大明神、隨分長い嚴めしい肩書の稲荷様です。京都の伏見稲荷の總本家まで行つて貰ひ受けて來たのださうです。

こんな偉い御稲荷様が、今の長賀寺山の上に在つて、其の昔は隨分豪勢なものだつたと云はれます。

倉賀野が未だ宿場で賑はつた頃のこと、宿場筋だけは非常に開け

ても居たし賑はつたが、街道から直ぐ裏の方は、大木續きの林や森、其の上、處々に塚が散在して居たとのことです。取りわけ、今の下町の街道北は、全く文字通りの森、林、そして塚の連續であつたと云はれて居ります。

此のうちで一際高く、大きかつたのが今の長賀寺山でした。寺は社寺合併の際、養報寺へ移されて既になく其の後は人跡全くなく、思ふが儘に茂つた樹木雜草は、狐狸の棲家として申分ない所となつてゐた。

澤山の狐共が棲む樣になつたのも、それから間もないこと、そして狐共は山の頂に穴を掘つて、附近の家畜や野鼠を餌食として居た。

「狐に手を出すと、必ず其の祟りがある。」とて、人は決して之を責めなかつた。否寧ろ大切過ぎる位にし、遂には神として信仰の對象と迄なつた、だから狐の大將悠長なもので、山の上から徑行く百

姓を見下し乍ら、

「何しに行くぞ百姓よ。」と云はんばかりの顔付きて狐の機敏さにも似ず、毎日毎日、のたり〳〵と動いてゐた。

此の狐共が當時の人々に、よく乘り移つたとか云ふので、寄り寄り相談の上、山の中腹へ立派なお宮を建てた、時々參詣者が狐のよろこぶ油揚を持つて行つた。其の油揚を穴近くに置いて拜んで居ると狐が出て來て其の油揚を持ち込むのが見えたといふ。

評判は評判を生んで、稲荷大明神の旗が段々と數を增し、往き來の人も日一日と多くなつて來た。

二月の初午には、此の御稲荷様の祭り日である、世話人とか責任者とか云ふ人々さへも出來、旗をくれる、赤飯を炊いて出すと云つ

た具合て、それはそれは賑かてあつた。

此の御稲荷様は誰れにもよく乗り移つて、不思議がられた、そして到底人間の力の及ばない不可思議な言をいはせたといふ、それが大人とばかり限らず、子供に迄、よくのつたといふ事てす。大人の留守の時など、子供達が此のお宮の中へ入つて、丁度祈禱者が唱へる様な事を眞似て居ることなどもあつた。

それは或日の午後のこと、何時もの様に集つた子供達が、五六人車坐になつて語り合つて居たが、やがて其の中の一人が、御宮の奥から幣束を持出して來た。それから手拭で眼を覆ひ、手と手の間に幣帛を挾み、兩手をしつかと合せて顔の高さに持ちあげてから、さて次の様な文句を唱へ出すのてあつた。

「あさ山、は山、羽黒の權現、ならびの稲荷の大明神、かみしみ言はずに、中はべんするおかまの神様、祓ひ給ひ、清め給ひ、稲

荷みゑみため、カンゴンシー、ソンリーター、コンターケー祓ひ給へ、清め給ふと申す。」

と、聲高らかに。二三回繰返すのであつた。

すると不思議や、此の子供の全身には激しい痙攣でも起つたかと思はれる樣に、ぶるぶるつと固くなつて震へ出すのであつた。幣帛は確と握つた儘である。時々大きく震へ又小さくなる。緊張し切つた聲帶からは、此の世の人とも思はれないひすばつた聲を出した、間もなく幣束を持つた儘直線的に倒れた。側に居た四五人の友は、吃驚して、名を呼び叫び乍ら、或は搖り、或は動かしたが、倒れた子供は容易に元の子供にならなかつた。泣きだす子供も出て來た、下駄を持つて逃げだす者もあつた。一番年長の一人が

「下町の御嶽おばさんを呼んで來い呼んで來い。」と、叫んだ、他の一人は青くなつて走つて行つた。間もなく、おばさんをたのんで

來たがおばさんは何の事もなげに

「何だ、のつたんか、お稲荷様がのつたんだらう。心配はないよ背中へ犬と言ふ字を書いてやりなさい、犬、犬、犬と一生懸命字を書きなさい。」

子供達は、何の事だか少しもわからなかつたが、おばさんの云ふ通りに犬、犬、犬と幾回も幾回も指先で、倒れた友の背中へ書いてやつた。おばさんは、「もうよからう。」と、云つて子供達を離してから「もうこんな所へ來て、惡るい事をしてはいけないよ。」と、

斯う云ひ乍ら、まだ倒れて居る子供の背中をドーン、ドーン、ドーンと三つ程叩いた。そして四ツ目の手が下され樣とした時、ウーッと苦しさうな呻吟と共に起き出して來た。

斯うして間もなく元通りにはなつたが、こんな事があつてからと云ふものは、「めつたな事は出來ないぞ。」と、一層大切にする樣にな

つたと云ふ。

願かけに來る者も愈〻增して來た。特に宿場町としての倉賀野には客商賣が多かつた。宿屋の主人、內儀さんが、石段傳ひに上つて來ては祈願をこめた、それは云ふ迄もなく客人の足止めてあつた。不思議な事に、今日は何人客がある。明日は又何人と、ピタリピタリと、あてたと言ふ。

何々屋、何々樓等書き出された大きな燈籠、堅固な石宮等、それは〳〵澤山並べられた。そして色取りどりに美しく、實に整つたよいお稻荷樣だつたといふことである。

此の當時より程經てから色々の都合で、此のお宮も養報寺へ移される事になつた。

町の靑年團の力で遂に移し終つたが、それからと云ふものは、どうした事か人足も次第々々に減へつて來た、其の後年を經ること幾星

霜、今は全く顧みる者もなく淋しく養報寺門の中、根無し松の東に、當時のお宮が獨り昔を語つてゐる、正一位大々儀式倉山稲荷大明神の最後の姿である。

## 三五　上町一里塚

其の昔、主なる街道の所々には、土饅頭の樣に盛立てられた塚を數へる事が出來た。

エッサホイサの駕籠舁きや、草鞋脚絆に道中笠の其の頃の旅人の、唯一の道しるべとして織田信長の頃に造られたのが此の一里塚の由來である。

此處は倉賀野町今の上町、町を外れ樣とする處に安樂寺がある。

この寺を隔る事西へ約一町、中仙道を挾んで南北に高さが一丈餘、面積約二畝歩位の塚が兩側に一つづゝある。其の塚の上には枝振りの此れは又何と美しい樅の木が枝をさしのべ、南北兩側に向ひ合つて中仙道を西へ東へ旅行く人の目標とされてゐた。

やがて時移り、時代の進むに從つて此の一里塚も次第に取崩される事になり、明治二十四、五年の頃迄は其の姿を留めて居たが、其の後漸く掘返されて或は畑地となり田となり現在の樣な立派な耕作の土と變つて了つた。

松並木に土藏造りに昔の面影を色濃く留める其の頃の倉賀野宿場、其の西入口に當つて一里

塚の形跡を尋ねても美しい樅の枝振も其の位置をすらもはつきりと知る事が出來ないのである。

## 三六　猪山

倉賀野を岩鼻へ通ずる今の砂利線から中仙道へかけてのあの附近一帶は、明治の初頃までそれは物凄い藪つゞきであつた。其の砂利線の近くに石の戸棚と言ふのがあり、其の昔藤原の某といふ者がこゝに住居してゐたと云はれてゐる。その人も何時しか居なくなつてその後は徒に狐狸の棲家となつた。所が此處は非常に人里にも遠く晝尙薄暗い陰氣な藪の中でもあつた爲、誰一人として訪ふ者もなかつた。

其の某の居なくなつてからは殊に狢が人に化けて、時折は路行く人をかどわかし惡戯などをすると言ふので、誰言ふとなく其處を狢山と呼ぶ樣になつた。

其の儘明治の世に入り此の砂利線に鐵道が敷かれる事となつた。

今の高崎線である。此の鐵道を敷くに就いて石の戸棚である狢山も、次第に取こはされ遂に一聲高く鳴くと共に何處ともなく飛び去つたと言ふ事である。

この戸棚に棲む狢山の狢は、

此の邊には史蹟もあつて多くの塚があり、砂利線の直ぐ東に當つては大應寺と言ふ相當の寺があつた。夫れ故に今も尙大應寺の名前

を地名として殘し、この附近の田圃や畑を指して大應寺田圃とか大應寺畑とか云つてゐる。かうしたゆかり多い倉賀野町の言傳へを果して町の人は何人知つてゐるであらうか。

## 三七　下町の庚申様

五穀の神、農業神として、御庚申様を祀る風習は、昔も今も變らないが、此の御庚申様を鬼門除けにしたと云ふ事は、さて何時頃からの事でせうか。

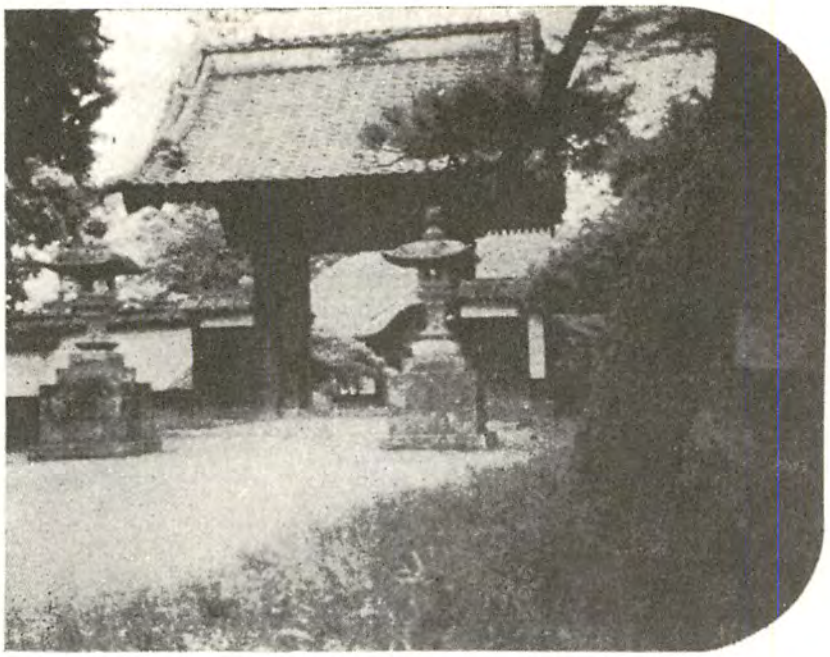
こゝ下町の御庚申様は、其の昔倉賀野城の鬼門除けに立てられたものだと云ふ、そして多くは南面して居るのに、これぱかりは北向になつてゐる。

五穀の神、農業神としての御庚申様が鬼門除けに而も北向きに立てられてあるのは、全く珍らしい事である。尚此處には、庚申様と共に二十二夜様と云つて、普通二夜様と云ふ女の神様、お産の神様まで併せ祀られてあつて、此の神を信仰すると、お産が大變輕く濟むと言ふのである。多くの人々は、此處に二十二夜様まで併せ祀られてある事には氣が附かないらしい。そして御庚申様だけと思つてゐる者が隨分多い様だ、從つて何時とはなしに御庚申様、御庚申様と云ふ様になつた。

さて此の御庚申様に就いてであるが、今から二三百年も昔は隨分賑かで、特に東の方、埼玉の地から大變な信仰者があつたとか、其の影響が明治の世にも及んで、近くは新町、本庄方面から、遠くは深谷、熊谷附近の人々までが御詣りに來たと云ふ。そして御詣りとは云ふものの實は夫々祈願をしたものらしいと古老の言葉である。

望　遠　山　狩　(36)

様　申　庚　の　町　下　(37)



養報寺山門

七佛

何時頃から立てられたのか、解らないが、今より凡そ百九十年程前、卽ち寶暦年間、德川第九代將軍家重時代に、一度立て直し、其の後、町の中組の庚申様として信仰を集めて居たが、何時とはなしに廢れ、昭和の御代に迄持越されて來たのである。

畑の中に細道があつた。其の細道から一足入つた處に塚があつた其の塚は略三角形で二坪許りの小さなものだつた。其處へ雜草が生ひ茂つてゐたが、其の雜草の中に、離れ離れになつて倒れて居た御庚申様をよく見かけた。此の御庚申様の塚を巡つて桑畑がある。

又細道が通つて居る。斯うした桑畑や細道から時々女子供が眼を光らせてゐた。

子供達は丁度、こそ泥の様に見えては消え、消えては又姿を現して居た。それが朝に於て最も多かつた。不思議な事もあるものと、其のうちの一人に尋ねて見た。すると子供の一人は、「此處へお賽錢

拾ひに來たのだよ。」と、答へるのであつた。誰れが始めて發見したのか、お賽錢目當の子供達が、何時とはなしに此の樣に集つて來るのであつた。

こんな見る影もない御庚申樣へ、斯くも大勢の子供が集るからには、相當の御詣人があるに相違ひないが、殆ど御詣りに來た人の姿を見た者がないと云ふので、何か理由があるのだらう誰が一體お賽錢を上げて居るのであらう？一人位は見た者だつてありさうなものに等、とりどりの噂さへ言はれる樣になつて來た。

ところが、此處に大變物好きな者があつてそれを見屆け樣として忍んでゐた。

夜になつた。最う九時も過ぎた頃、四十歲前後の女の方が、邊りに頻りと心を配り乍らこの庚申樣へ近附いて來た。そして幾らかのお金を投げてから、暫し默然として其處に蹲つて居た。

心からなる祈禱をさゝげてから又去つて行つた。其の影を追ふ様に見送つてゐるとこれも女の方て、今行つた人と反對な方向から足音を忍ばせてこゝを訪れた。そして前の人と同じ様に暫くして去つて行つた。

忍んで居た人は、漸く不思議が解け初めた。屋敷稲荷に物をあげても、歸り途で後を振り向くと稲荷様は決して食べてくれないと云ふ云ひ傳へを思ひ出したり、又或る庚申様は、祈願中、其の姿を見られると全然御利益がないと聞いた事などを併せ思ひ出して見た。或はこんな事が御詣りに來る人達の耳へても入つて居たものかも知れない。此の解釋は信仰者の心に全く一致してゐた。

幾日か經つた或日、此の人は前記の女を尋ねた。すると信仰者たる女は斯う云ふのだつた。

「此の御庚申様へお詣りする人は、私ばかりではありません。私

達よりも、もつともつと不幸な人、重病患者を子に持つ親、身の不具を治さうと願かける人、又家運繁昌に等、隨分大變てすが、どの方もどの方も決して願かけする人は人目につかない樣にと心を配り

「願はかけなよ
人目にやつくな」

と、さへ云はれ、人目についた時は決して御利益がないと云ふ云ひ傳へてあつたよ。」と、それて一切は解けた、然し其の後も相變らず祈願する者は絶えなかつた。

暫く經つてから、愈々此の御庚申樣が世に出る樣な事件が起つた否寧ろ永い間の雜草の中に顧みられなかつた神の祟りとても云はふか、不思議な神力を見せたのてあつた。

其の頃中仙道を下る一人の旅人があつた。丁度此の地まて來た時街道筋から北へ入つて休息所を探してゐた。ふと見ると小高い塚が

あつて、小石が倒れて居る。「これは丁度好い。」と、腰を下した、二三ぷく煙草を呑んでから「どーれ、出掛けようか。」と、立ち上がらうとしたが、どうした事か腰が立たない。いくら力を入れて踏張つてもだめだつた。「俺は氣ても狂つたかなァ。」と、云ひ乍ら手や膝をつねつて見たが、別に變つて居る樣子もない。「さあ弱つた、これは困つた。」と、何回も何回も繰返して居たが、腰が下の石に吸ひ付く樣になつて、全く施し樣もなかつた。旅人は困りぬいて居たが、ふと腰の下を見ると、

今自分が腰を掛けてゐる石に、何か刻物がしてあるのに氣が付いた。

「あ！　これは何かの神様に違ひ無い。これは申譯がない。」と、よく見ると其れは御庚申様であつた。

そこて旅人は、此の御庚申様に向つて一生懸命誤まりました。

すると不思議や、絶對立つ事が出來なかつた旅人の腰は、何の苦もなくすつくと立つ事が出來た。旅人は大變驚いて急に細道まで跳び離れたかと思ふとバッタリ、其の場に坐り込んて了つた。

此の驚きはやがてあらたかな御庚申様の神力に外ならない。と思ふ様になつて、これ程の御利益ある庚申様をあの儘にしておいては濟まない事だ、斯うして町の人々にも、此のお話を告げました。

此の話を聞いた町の人達は、薄々御利益を知つて居た上に、今又旅人の出來事を知つて一層驚き入りました。

「確かに御利益のある御庚申様だ、これは粗末に出來ないものだ」

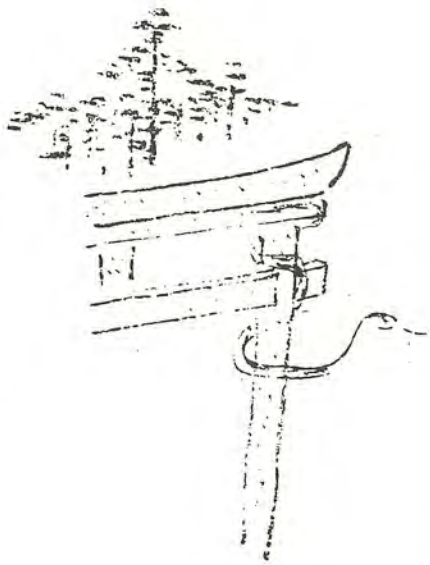
と、信仰者が段々に増して參りました。其れから暫くして、此處に大願成就と書かれた、赤い旗、白い旗等が幾本も幾本も立ち並ぶ樣になつて、遂には、此の御庚申樣の周りを取卷く程になつた。

斯うなつて來ると、どうしてもあの儘の御庚申樣では濟まなくなつた。そこで町の心ある人々が寄り寄り相談の末、幾らかづゝの寄金を基として、現在の御庚申樣としたのである。と、……

## 三八　八幡裏の大蛇と小蛇

何十年か前のこと、八幡裏に大蛇が出ると言ふ奇怪な言ひ傳へがあつた。而も其の大蛇を見ると必ず大病をするか、或は運惡るい人は死んで了ふ等、不思議な傳說である。此の大蛇には、幾匹かの子

蛇が居て、其の蛇が時々八幡境内に遊びに出て來ると云ふ。然しはつきりと、見た者は無いらしい。時々子蛇の拔殼を持つて來て置くと、其の家は次第々々に繁昌して、魔のさすこと等絶對に無く殊には五穀を扱ふ百姓さん等では魔除けには申分のないものとして、非常に欲しがつた。それ故、此の近くの人々は、一生懸命、手に入れ樣としてあせつたが、さう容易に得られるものではなかつた。之を見付けるには、どうしてどうして命懸けの仕事だつた。若し大蛇でも居て、それを見て了へば死か大病、それに何時出て來るかそれさへ不明なのだから一層薄氣味惡い。子蛇の拔殼は欲しい。大蛇には是が非でも逢ひたくない、斯うして去るには去られず、行くには行かれず迷つたと云ふ。何時



しか年過ぎ星も移りかはつて人の心も又變つてきた。

「成程ね、そんな話もあるもんですか。」と、今では別に氣にする者もない。

## 三九　狢の清さん

今から百年も前の事だつたてせうか？

町の南の方に大變頭の禿げたお爺さんが居りました。よく頭の禿げた人の事を子供は藥罐頭等と云ひますが、丁度此の頃は家々の燈火がランプだつたので、此のお爺さんの事を、ランプ頭ランプ頭と惡口を云つて居たのださうです。

此のお爺いさんの本當の名を清さんと言ひましたが「清さん、清

さん」と言ふよりは、「ランプ、ランプ、ランプ清さん」と云ふ方が解りがよかつたと云つて居ります。

さて此のお爺いさんは大變氣だてのやさしい人だつたが、時々むーッと怒る事が玉に傷でした。然し怒つても又後てはさつぱりして居る方でした。

從つて他人から惡く云はれる樣な人てはなかつたが、唯一つ惡るい癖がありました。それはちよいちよい夫婦喧嘩をする事でした。

齡にも似合はず、むーッとしてくると我慢出來ないたちと見えます。直ぐ大聲で怒鳴り出します。お婆あさんも負嫌の氣性を持つて生れたと見えて、一口、二口言ひ始めると、直ぐお爺いさんのことを「ランプ、ランプ、ランプ頭めが。」と、言つて怒鳴り返すので何時も喧嘩が絶えませんでした。ランプのお爺いさんは、何より之が一番つらかつた。だからランプと云はれると、最う口惜しくつて口惜

しくつて仕方がないので、つひ本氣で怒つて了ひます。

「出て行け、さあ出て行け！お前の様な者は最う家へおく事は出來ない。」と、いきり立つて、遂には外へ摑み出すと云ふのでした。

お婆あさんはお婆あさんで、

「出て行くともさ、こんなランプの處など、誰れが居てやるものか。」と、云つて、ぐん〳〵出掛け始めますと、近所の人が見るに見兼ねて仲裁に入ると云ふ譯です。

こんな具合で月に一回や二回は珍らしくなかつたらしい。ところが不思議にも決つた様に喧嘩がはじまると此の近くに棲む狸公がやつて來て戸袋に前足をかけて、戸のふし穴から中の様子を覗き込んで居たと云ふのです。そして人が行くと前足を外して、こそ〳〵と闇の中へ姿を消して行く事がよくあつたさうです。

別にそんな事には氣を留める必要もなかつたし、何とも思つて居

なかつたランプ爺いさんは、しと〳〵と雨の降る或夜、ほろ酔ひ機嫌て歸つて參りました。ところが歸りが遲いとても云ふのてあつたらうか、お婆あさんは、不機嫌な顏をして、文句を並べ始めました。よい氣分て歸つて來たランプ淸さんが座敷へ上るか上らぬ中に歸る早々文句を並べられたのでは面白くありません。

そこてこれも亦一言、二言返し文句を並べましたが酒の勢て、遂言葉も亂暴になつて居たと見え、到々押へ切れないてあの惡るい何時もの病氣が出て來ました。

おばあさんは肩を怒らし口を尖らして、「何てすつて、このランプめ。」と、一言云つて了つた。さあランプのお爺いさん赤い上にも赤くなつて怒つて了つた。到々お婆あさんを追ひ出して了ひました。雨の中を生れ故郷の中居の家へ歸つて行きました。お爺いさんは其の儘、床の中へ入つて眠つて了ひました。

夜中の十二時も過ぎて、最う一時近くなつたが、未だ外はしとしとと雨が降つて居た。ランプ爺いさんが、ふと目を覺しますと、表戸の方に、

「清さん！清さん！」と、云ふ聲が聞えて來ました。

「何だらう」

不思議に思つた、ランプのお爺さんは頭を僅かに持ち上げ表戸の方へ耳をすまして居ますと、又、

「清さん！清さん！入れておくれよ、入れておくれよ。」と、繰返し繰返しさもせつなさうに言つて居るではありませんか。

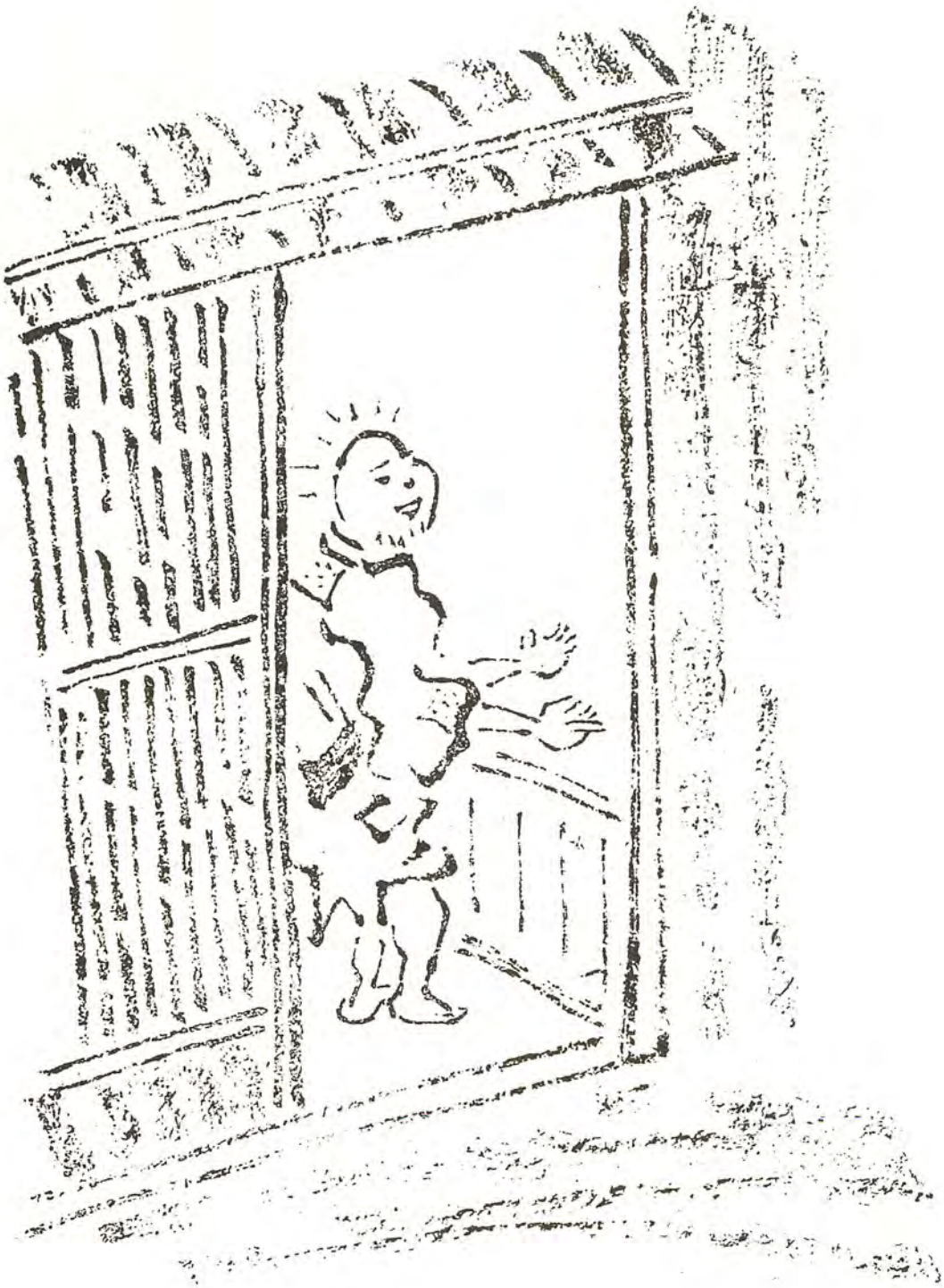
「おやあの聲は確かに先刻、出て行つた筈の婆あさんの聲だが、今頃なんだつて歸つて來たんだらう。さては婆あさんのやつ、矢張り此處が戀しくつて歸つて來たのかな、斯うして歸つて來るところを見ると可愛想なものだ、よしよし入れてやらう。

と、言つて床を立つて、戸口まで行つてから、

「婆あさんかい、婆あさんかい。」

と、二言ばかり呼んで見たが返事がない。

「可笑し



いなア。」と、思ひ乍らそれでもと思つて、もう一度、

「婆あさんかい。婆あさんかい！」と、やゝ力のこもつた調子で呼んで見たが、相變らず返事がない。

「ははあ！今度こそ本當に改心したと見え、申譯なさの爲、胸がふさがつて居るに相違ない、どれどれ開けて入れませう。」と、云ひ乍ら、がらがらッと大戸をあけた。

「おやッ！」

何と驚いた事には、其處に立つて居たのは、婆あさんどころか、八尺以上もあらうかと思はれる大入道であつた。其の大入道がかけ殘つた幾枚かの大きな前齒をむき出して、にやりにやりと笑つて居るではないか。ランプ爺さんは吃驚仰天、

「ワーッ！大聲と共に、其の場にどしーんと腰を拔かした儘、立つ事が出來なくなつて了つた。

其の大きな聲に氣付いた近所の人々が、何事が起つたのかと思つて、清さんの家へ、やつて來ました。すると、此の足音に氣付いたのか大入道は、何時もの、こそこそ狸になつて暗に姿を消して了ひました。

近所の人々は清さんの家の入口に立つて「清さん、清さん、どうしたい清さん！。」

と、呼びましたが、清さんは目ばかり、ぱち〳〵して居て起き上りません。其の裡に、ランプ爺いさんは「お前さん方か、儂をだましたのは？」と、問ひかけました。

何も知る筈がない近所の人達は、「どうしたい清さん、そんな青い顔をして。」と、又聲をかけました。すると漸くの事自分にかへつた清さんは、今あつた一切を眞劍になつて語り續けました。近所の人々は、「何てすか清さん、そりや狸公に化されたんだね、今庭先を丸

々と太つた狸公が、こそこそ藪の方へ入つて行つたよ、きつとそれに違ひないよ。」

始めて知つた清さんは「成程ね、さうてしたか、狢と言つても馬鹿には出來ないものですね。」と、歎息したと云ふ事です。

此のお話は、倉賀野神社の東の方にあたつて城趾がありましたが其の近くにあつたお話ださうてす。誰れが見たのか、何時も清さんの家の所へ來ては狸が遊んて居たり。夫婦喧嘩を見たりしてゐたと、そして遂にはあの様な大入道に化けて清さんを驚かしたと言ふのて、誰云ふとなく清さん貉、清さん狢と云ふ様になつたと云ひます。

## 四〇　養報寺の七佛藥師

古い事に於てはこれ程古い藥師様が他にあらうかと思はせる程、苔むし、ひび割れのした古めかしい藥師様が、此處、養報寺の七佛藥師様です。

倉賀野町の下の方に藥師堂と云ふ地名があります。其處に何百年も前から安置されて、眼病一切に御利益あるとて、大衆の信仰を集めてゐたが、明治の初め頃、今の長賀寺山に移されたのである。

それから暫く此處にあつたが、再び養報寺へ移されて現在の位置に据えられたのである。

此の藥師様には小さく切つた紙へ、「め」と云ふ字を一字書いて上げて置くと、どんな眼病でも直ぐ治ると云ひ傳へられ、極く最近ま

七佛眼病をすくはせ給ふ

ては、よく藥師様の頭の上や、肩などに、「め」「め」と、書いた字が載せられてあつた。

今では殆ど振り向く者もないと見え、徒らに風雨にさらされて居るが、語るなら尋ねてみたい昔話を……

―(をはり)―

昭和十五年十月二十八日印刷
昭和十五年十一月五日發行

『非賣品』

編者　群馬縣群馬郡倉賀野町
倉賀野小學校
徳井敏治

發行者　群馬縣群馬郡倉賀野町一、一七六
倉賀野工場
須賀新一郎

印刷人　群馬縣前橋市竪町一〇
深町牧太

印刷所　群馬縣前橋市竪町一〇一
株式會社前橋印刷所

取扱所　煥乎堂
前橋市曲輪二町
電話代表四二六〇

# あとがき

『傳説之倉賀野』は、倉賀野町出身の実業家、須賀新一郎さんが郷土烏川の畔に須賀製作所倉賀野工場を建設し、皇紀二千六百年を記念し昭和十五年に倉賀野小学校研究部に企画編集依頼し出版されました。その後、第二次世界大戦・耐乏生活・復興への努力が続く中で須賀製作所は解散、この本も散逸し、昭和四十九年に大山正明さん・大山達郎さんにより再版されておりましたものも含め持っている人は少なくなったと聞いております。

この私も満九十三歳になり、今年倉賀野は、高崎市合併五十年を迎えることになりました。倉賀野では郷土史の研究が盛んな時代がありました。遺跡の調査研究や石碑も立てられました。そこで『傳説之倉賀野』もさらに多くの人たちに読んでいただき、民話の里としても親しんでいだけるように、大山達郎さん・矢島滋樹さんの御協力をいただいて再版の増刷をさせていただくことになりました。

かつて中山道・日光例幣使街道の分岐点として繁栄した倉賀野宿、戦国時代の倉賀野城の興亡、参勤交替する武士の大名行列、諸国の商人、旅人の往来で賑わった街並み、また上利根川（烏川）水運の有力な倉賀野河岸として、大名の廻米・塩・煙草・雑貨を積んで交易が行われ、そこでは人々の交流も盛んに繰り広がり、そのありのままの姿の中には喜怒哀楽・悲喜様々な庶民生活の実態が見られそれが伝承され伝説として語り継がれてきたものだと思われます。そこには先祖の心が見えてきて共感することも多くあります。

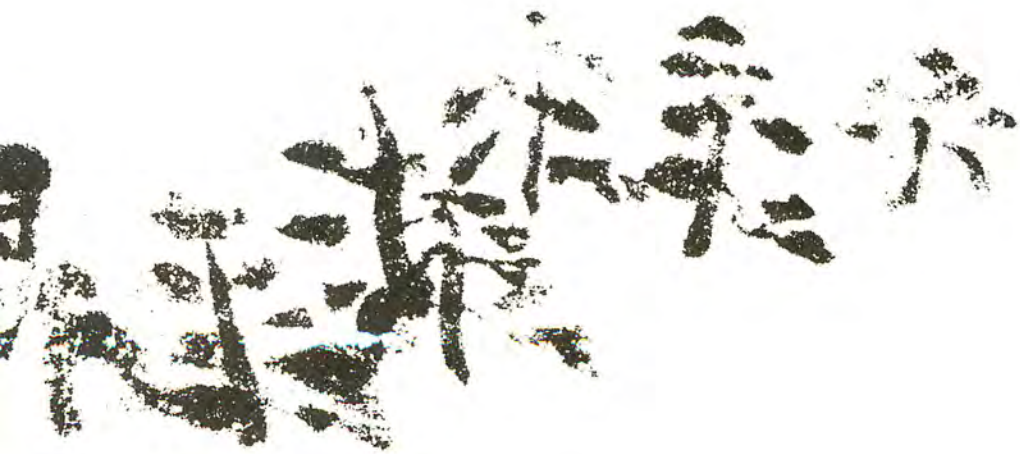
皆さんがこの本に触れながら遠い昔の人々の姿・心に思いをはせ、郷土『倉賀野』を愛す人たちの輪が広がり由緒ある史跡と傳説を語り継いでいただく一助となればと思っています。

平成二十五年十月

須賀　健一

皇紀二千六百年　伝説の倉賀野（復刻二版）

平成二十五年十月二十五日　印刷
平成二十五年十月三十日　発行　〔非売品〕

発行者　高崎市倉賀野町一一七二
須賀　健一

印刷所　茨城県つくば市天久保二―一―二〇
株式会社　イセブ